



091560-000-1

特11-533

童謡甲斐の胆寒

仮名垣 魯文 / 著

M24

DBN-2559



幼童歌甲斐肝取之序

往昔くあり經し草雙紙と裏表の服稿ハ  
違ふ新作新著。出き星記者の雨垂流。西鶴自  
笑を九呑の素人脅迫の言文一致。と先生ふ  
れど看客は昔じと違ふ眼明千人。誰のは何  
の再稿と。先刻承知の諸君。お覽み供す者  
なれば文壇社會の老将。と雷名高き假名垣  
翁が著述を爲る續話さへ。喜怒哀樂の筆の  
操。貞婦孝子の履歴を綴せる外題も幼童歌





甲斐の國ある椿説寄談。聞さへ凄き肝取。と  
その頃巷説の實録なれば。世に流行の赤本  
と違ふ洋綴の製本をは。お覽の上で御好評  
を偏に希ふと主人も墮り。拙き筆にて序文  
とあしぬ

楓川岸の市隠

春塘

山田伊之助

童謡甲斐の膽寒

第一唱

往時天保十己亥の春まよみの甲斐國巨摩郡下山村の兎民斧兵衛  
等夫婦の者元來暴戻相双びて虎狼の態を逞しふし同村の農友八が  
一子米藏といへる童兒が活膽を振奮て多くの黄金に換んとせし慘  
狀無比の顛末を當時郷の童子等が専ら哇に唱ひしは

汝等下山幼童達聽きやれ大陽が没たら野遊び止める怖い蠅螂鉞  
り揚て胸を割木の柴刈仕事腹をえぐられ膽玉抜かれ癩病藥に飲  
まれちや成らぬ聞も身延の身の毛が彌立オヤツカな肝潰し  
抑も此膽寒の原因は何たるぞ徳川十一代の將軍源家齊公と聞け奉  
つりしは其實當家三卿の一家門一ツ橋大納言治濟卿の三男にして  
前の將軍家治公の養子に立ち天明六丙午年將軍宣下あり大政を執

童謡甲斐の膽寒

ると五十年天保八丁酉年箕裘を嫡男家慶公に傳へて後西城に移轉  
 られ大御所と稱され外面隱居の体ながら猶大小の政事に涉り諸役  
 人の黜陟悉皆西城の沙汰に出ぬはなく殊に此君の治世五十年間昌  
 平の極に至り世は華美驕奢の風に移り將軍數多の美女を聘し營中  
 さながら秦の阿房宮中に髣髴とし嬋娟双びて媚を獻じ妖桃競ふて  
 寵を争ひ寵遇殊に勝れたるゝ其親族功無きも小身より忽地進み國  
 政に預る者内事を執る者多き中又大御所在職の頃小納戸頭取を勤  
 めし中野播磨守清茂後に石翁が家齊公の寵深く威權肩を並ぶる者  
 なく政事内外諸役替へ内願筋の周旋等中野が手裡に出ぬ事なく此  
 寵遇を得し起原は清茂未だ小吏の頃常に下總國八幡村徳ヶ岡別當  
 日蓮宗知泉院を信仰し身の冥福を深くも祈り折節微行して彼地に  
 詣で現知泉院父子にも懇意を結び一年參詣の歸路知泉院の次男な  
 る船橋驛の旅舎山本市兵衛方に一泊の夜豫て其父知泉院より前報

有し賓客なれば平凡の旅人は請ぬ廣間を掃き清め田舎調理も江戸  
 擬し海邊の土地の魚撰み利根川に生ふ鯉の羹行徳に立つ千鳥燒葛  
 西の野菜取混て追々運ぶ酒肴の饗應先一盞と勸むる時しも中山の  
 現住守立院光住は前の知泉院が娘にて我爲の實妹お美代お美世の  
 両女を引連れ一里餘りの當家よ來りて中野が旅室を訪問るに清茂  
 豫て守立院は當家の主個市兵衛と俗縁ありと聞知るから旅室に招  
 きて獻酬こも一語らふ中に守立院は清茂に打對ひ最風情あき田  
 家の御旅泊さころ興なく覺されんと最醜くは候へど愚僧がふたり  
 の妹なるお美代お美世の兩人を召連て候へば苦からずば此御席の  
 酬酌に立せ侍らしまうさんが貴意の如何と恭しく問に清茂一識に  
 及ばず木の下蔭此やどりには花のあるじぞ望ましきと微醉機嫌に  
 興ずるにぞ守立院は次の間に控へさしたる兩個の妹お美代お美世  
 を呼出し清茂に初對面の挨拶を演べさせしに清茂は田舎娘と思ひ

第 二 唱

の外なる姉妹の容貌に驚ろく計りなり

童謠甲斐の膽擧

當下中野清茂は知泉院が姉妹の兩個の娘を傍近く招きてつらく  
 客子を見やるに姉のお美代と聞えし其妙齡十七八婀娜にして麗  
 はしく玉の顔せ雪の膚田舎娘と見ぬ前は心の中に輕侮も茲に初  
 て驚く計り妹のお美世の其容貌姉に比すれば八重一重花の眺望の  
 劣るに似たれど三五の月の稍くに水離れせし趣きありて是も亦嬌  
 娥にや類ひさん斯て其兄守玄院の指揮に應じて姉妹共に盃を翻め  
 酌に立ち姉のお美代は床の間に立掛ありし灘の糸玉琴取寄せ一曲  
 の爪音に興を添ゆれば妹は立て掌中の舞を作す嬌啼婉婉梁上の塵  
 動き春風爲に情を誘ふ中野は持てる盃傾け袴と酒の流るゝも覺え  
 ぬ迄に恍惚と佳興に入て膝寛げ夜の更るをも顧ず遙に告る家鶏の  
 聲に驚き杯盤を収めて光住同胞を退かしめて寐室に入り最と愉快

童謠甲斐の膽擧

き醉眠に翌日出立の期を失し日の中天に昇る頃驚き覺し枕邊に早  
 晩お美代姉妹の侍仕て清茂が歸路の支度に心を添へ諸事万端を舍  
 兄光住が周施して朝饌を調じ此の日清茂は旅駕籠に忍びて江戸よ  
 立歸りぬ元來此中野清茂の猜智世才に長たる者も是時の老中若年  
 寄諸家に立入り眞實らく權家の氣色を窺ひて阿諛専らに愛顧を  
 得てろの庇護により御小納戸に登庸し君側に咫尺する身分に至り  
 猶立身の時を得むと其術計を勘考るに大樹の深く美女を愛し營中  
 數十の妾を聘すも飽給はぬを常に見て兎角青雲の棧しに臨むは美  
 女を厭するの他に策なしと思ふより囊に下總中山なる知泉院の姉  
 娘お美代が容色營中にも双ぶ方なき美貌にして且秀才ある性ある  
 は其動靜にて知られたり争てか彼を養女として將軍家に侍仕しめ  
 んど是より中山知泉院が許に自身忍び行てお美代を養女になした  
 き旨を云々と密談なし此事許容あるに於ては當山一門親族の榮え

は更なり其子息守玄院の法力を天下に傳へ貴僧一家の幸福を來た  
 さんこと我等が意中でありとの説得に知泉院親子の者深く歡喜異  
 識なく承諾てお美代を中野が養女として其妹お美世を差添へ江戸  
 駿河臺なる中野が邸にぞ送りける其後清茂は此お美代を實子と言  
 立大樹の侍女に仕ふまつらす又艶麗秀才衆に勝れ内房又有まじき  
 容儀なれば中野が豫ての思慮違はず大樹の懇望内命下りてお美代  
 日あらず紅閨の伽に召され寵遇殊に深きより程なく中野の部に  
 列し鍾寵無二の餘榮溢れ其養父清茂の進んで御小納戸頭取と登庸  
 なし常に君側に仕候して政務の大小何事にも播磨守(清茂)の意中  
 を問ひ談合ありて命令の基本とある事多ければ中野が威權老若の  
 重役諸侯を凌ぐに至れり去程又天保八丁酉年大樹職を辭して西城  
 に移轉の折播磨守清茂も隠居入道して御大所より石翁の名を賜り  
 外面非役の体ながら以前に替らず登營なし大御所の御傍去らず御

相談に洩るゝ事なくますます威權を赫かし諸家の賄賂諸人の苞苴  
 に浮べる雲の富に榮に盛り満しゝ衷類の始めを開く禍災の家に生  
 ずる萌芽ありけり

第三唱

支那六朝の時陣の後主臨春結綺望仙と號くる三箇の高閣を起すお  
 のく高サ數十丈連延數十間ろの應牖千欄は皆沈香白檀を以て之  
 を作る飾るに金玉を以てし間ふる又珠翠を以てす閣の中に設置衣  
 服玩器は皆珍奇美麗の品あり後主詞曲を好み能詩文を作る宮女女  
 樂士を御遊の坐に加へ詩を作らしろの詞語の麗しきを選び管絃に  
 合し美女千餘人をして此の曲を唱へ謠はしむ此歌多く宮女の容色  
 を譽たるにて君臣飲宴して樂めりどぞ既に徳川將軍家十一世大樹  
 西城に退きて花臨春樂の舞曲盛んに昌平の化君臣に流れ中野播磨  
 守入道石翁が如き彼の江總孔範等が陪從に等く常に君側に仕候し



童謠甲斐の膽擧

て君寵深きに威權を占め諸願の周旋手裏に出るより賄賂随ッて入り陶朱猗頓が富に耽り驕奢贅澤擅まゝにてろの別莊を隅田の東岸に新築し香木奇石を庭上へ供へ營繕の結構善盡し美盡し本祿万石以下は屬せど壯嚴苑も大諸侯を凌ぐに至れり是れ皆養女お美代の方が君寵の餘榮に出たり去ば社その實家中山知泉院父子相双びて幕府の祈願所となり西城奥向の信仰殊に厚く祈禱の代參往復して當山並びに入幡なる徳岡八幡の別當所も上の信ずる下之に隨ひて信仰多く詣人常に群集せり却説阿美代の方の妹なる知泉院が乙娘阿美世は姉に侍仕てしばらく西城に在るかど石翁思ふ由有けん已が手許に引取て駿河臺の邸に入れ其後隅田に新築の別莊に置その内に良縁あらは何れへ嫁嫁らせんどの約束を實父の方にも言送るに知泉院父子の者は中野が庇護に當山の榮々を占し恩惠あれば隨意はからひ給はる可しと阿美世が上をも委託せり從是前中山知泉

童謠甲斐の膽擧

院が次男にて八幡の守立院に實弟なる船橋驛の旅舎山本市兵衛が次男なる三次郎といへる者幼稚より叔父守立院の手許に預け習字讀書も學ばしめ長男清兵衛は放蕩にて土地の傀儡女を買馴染渠と共に江戸に走りて家にあらねば往々ハ次男三次郎を家督に立むと思ふ折柄姪の縁故に中野家より其三次郎を武士に取立得させんとの内意ありしに市兵衛は大樹が無二の寵臣と世に隠れなき中野家の所望の父子の面目にて姪は阿美代が青雲にあやかり我子の後榮と雀躍し直に江戸へ赴かし中野家お仕へしむるに清茂は未青年の三次郎を用人とし石役ひ家事万端を扱はすに此頃阿美世は西城より下りて中野が駿河臺の邸に來たり叔母甥の三次郎に出會なし常に親く語らへ共親戚の中と疑ふ者なく三次郎も獨身ゆゑ長屋住居の不都合ならんと清茂が許容により庭中の茶室を貸し此に起臥出仕の間阿美世は旦夕訪來たり幼稚なじとの叔母甥姉には劣れど

十分の容色あるお美世に對し梅に周流青柳の糸に結びし惡縁にや  
唯一二度の轉び寐に因果の習の早晚めぐみ此月よりして經水を看  
ず兎角に酔味の好ましければお美世は心中平穩ならず此事三次郎  
に密に告て談合せんと思へど脛に疵持て我から隔つ人目の關獨り  
心を苦しめり

第四唱

去程に中野清茂入道石翁は其年二月の下旬隅田東岸に新築なせし  
別莊全く落成せしかば此處に阿美世を留守居とし其身登營の折節  
此別莊に數日間止宿てその樓上より堤上の櫻花往來の人の群集を  
見渡し或夜は又庭上の四阿に宴を開き阿美世を始め侍女數多に酌  
を取らせ盃を傾け心隅田の川浪に隈なき月の影を眺め歌舞音曲に  
夜を日に繼勝手勤めの自在釜茶室に松風颯々ど雅致を占たる數寄  
屋の好事唯此邸に缺たる者は女色に耽る當主にして本家に畜る愛

妾等を召連ぬる不審されど常に家人等も瞬の折柄石翁は豫てよ  
り阿美世を妾にせんとの意ありて今回新築の此別莊に聘取て留守  
を委託し強て挑むにあらぬ共夫どわかしに情を運ぶに此時阿美世  
は其の甥山本三次郎と私通の胤を宿し、氣味に如何はせんと密に  
心を惱す折石翁が戀慕の様子是幸ひの誘ふ水といなみもやらぬ閨  
の床枕邊近くよる浪に老の皺さへ延たる心地是より阿美世を夜陰  
の伽とし寵愛二三の妾に勝れど阿美代の方を憚りて公然に妾と披  
露せず養女の格にて別莊に据置内よ素よりの姪娘なれば月滿産  
落せしは男子にて全く十月兒成しかど其實山本三次郎と密通の折  
り孕し胤もる月足らずの八月兒と石翁が前には披露し石翁も亦本  
妻妾の産たる息男息女ハわれど冬相麥の後れ咲いと、惘然に恩愛  
も彌まさりてぞ見えにける斯れば亞母の乳を撰み侍女此手を重ぬ  
騎の花掌中の玉と轉めて最愛みぬ然るに此男兒産れながら全身面

部白色に照を帯び加之ならず頭髪眉毛も共に茶色にして異形なるを親の慾眼に心にも止らず有しが光陰の駒の足掻の逸速く年甫三才髪置の時に臨めど其形容依然として所謂白兒の質なれば石翁心に惟ふやう此小兒の容体こそ豫て世にいふ天刑病癩疾の萌芽にして難治の症と看認たり町人農家も此症を深く嫌ひて詰婚の道を通ぜず八間の交際をさへ断と聞く況哉武家に於るをや小名ながら大御所の鍾愛深き余が身にして斯る難症を合し兒を家の中に養育せば公への恐れ身の耻辱憫然ながらも一家の瑕瑾我手許には養ひ難しと一日駿河臺の本邸に使節を遣り用人山本三太郎を隅田の別荘に招き寄せ庭を隔てし閑室の内に主従唯ふたり密談數刻に及びしを阿美世は居間に唯獨り此密談の何事を想像に我産の子の異なる形容を日頃より心に懸て嘆息ある御氣色なるが其事を談合せんとて三太郎をわざと招き給ひし歟又に行人と三年前密に通じ妊娠し

産し其子を大殿の胤と詐り塗附し悪事が露顯せしならん歟此日頃さる動靜はゆめく無ければ必定和子此上ならんと胸の癢を手に押へさし俯きし折もわれ密談果て石翁は茶室の中より三太郎を従へつゝ庭上の飛石傳ひ本間に戻り阿美世が菴屋に來たりし間もかく西城より俄の使者大御所の御意により即刻登營あるべしと仰は重き石翁が周章く支度を整へ駕輿促し出仕せし入相の鐘突出す隅田の花散る頃成けり

第五唱

當時中野家に立入て阿美世が持病の癩氣を療治しさもなき折も別荘に親く出入機嫌を窺ひ諷る業に妙仙とて最小賢し氣ある女針醫年齒は四十に近く營業柄の茶筌髪温和く見ねても笑栗の針持胸の底深き巧みは似た者夫婦にて此妙仙が本夫ある小石川原町の天公法現といへる裁醫の年齢は耳順を過れど強壯にして奸智に長け

醫業を表に患者を招き日蓮宗の祈禱に托し異藥を劑て難病は必ず  
 癒すと保証つゝ莫大の藥料を食りて飽を知らず世の難症に罹る者  
 天公が誇言に誑かされ祈禱を頼み治療を乞ひ無効の藥料を費す愚  
 民随つて多ければ法現夫婦近頃まで貧じかりしも俄に富み其貯金  
 を妻妙仙に命じて貧家へ高利に貸附返済期日を過る時は法現自身  
 その家に押行て何にまれ雜具の類眼に觸る物手當次第持歸る折も  
 あり又は身の皮の衣服を剝取り慘酷き限りを盡すに妻妙仙と之を  
 手傳ひ貪慾無情羅刹を欺き鬼の夫婦と近隣の人々擧つて憎み合へ  
 り宜なる哉此法現は元來中山知泉院が祈禱所の番僧成しが十八年  
 前知泉院が現住の頃祈禱料金百兩を或緡紳より寄附せしを窺ひ知  
 り其夜院主が閨房に忍び入有所を探り彼金を封の儘に盜み取り跡  
 しら波と逃去りて上總國長南の近村なる無住の小寺に便りを求め  
 往時實家は甲府にて藥種を業とし、者の次男にて有しかば少しく

藥味を聞知るからに毒藥を面部に塗り面体を變へ名を改め彼小寺  
 の留守居となり中山流の祈禱を行ひ或は病者に藥劑を施し愚俗を  
 引入る手術となす内門前なる魚賣の棒手振與市といへるが難症に  
 て重体なるを其妻の阿仙が法現の噂を聞知り祈禱の功力を頼み來  
 しかば乞に應じて彼處に到り加持を修行し藥を劑て深切らしく往  
 通中に阿仙は以前茂原宿の茶屋女にて濫皮の剝けたる顔に法現は  
 其性荒淫好色の賣僧なれば祈禱は措き妻の阿仙に物を送り小遣ひ  
 錢の不足を補ひ戀慕の情を運びしにぞ阿仙も墮落の淫婦あれば本  
 夫が長病の閨の間男戀しき折なれば五十に餘る老僧ながら年より  
 若き法現の強壯なるに想ひ合いつしか割なき中と成り與市が重き  
 病の床に身動きならぬを侮りて枕屏風に病人の眼を遮りて忍び逢  
 或夜は祈禱に托けて與市が家に泊り込み阿仙と臥床を共にするも  
 度々あれば病人の苦き中に此醜体を窺ひ知り或日法現阿仙のふた

りが屏風の外にひそくと語りふ鼻息與市が寐耳も幽に入りに堪へかね蒲團の外に這出ながら枕邊に在合し火爐に掛置し藥土瓶の煮立しを枯木の如き瘦腕さし延べ蔓おつ取て半屏風の外を目的に投付れば法現阿仙は咄嗟と飛退き投付られし熱湯の身中に染志に驚き怒り法現眼を刮出し屏風蹴倒し走せ寄りて傍邊の手拭取より疾く與市が首に纏ふと見ゆしが力量委せに締付たり

第六唱

法現勢ひ止を得ず怒に乗じて病人の與市を矢庭に締殺し呼吸絶に初めて驚き阿仙と而部を見合しつ、締付し手拭の手を離し蒲團の上に引摺上てかいまき打被阿仙に對ひ死に損なひめが身体も利かで手暴の舉動なしゆに焼傷の返報機會に乗じ懲して呉んと手拭に首を締たも殺さんとは思ひがけぬ此場の始末此奴には一人の舍弟も有と聞からは此事近隣の者に洩なばふたりが身の上及び

あん愚僧は寺に立歸り素知らぬ振て行ひ澄せば和女は今宵與市の病苦迫りて俄に病死せしと近邊に言觸て翌は我寺に埋葬を乞ひ來たれ長居は恐れと眞夜中又跡をも見ずして立去れば阿仙は本夫與市が死骸を病死の体にもてなしてあるく涙の作り聲に此事を近邊に訃音らして其手を借り棺に納めて法現が留守居の小寺に依頼なし翌日黄昏ひろやりに埋葬せしかど近隣の人々は與市が長の病氣を知らば養生適いで此世を去しと奸僧淫婦が毒手に罹りて非業に死せしと疑ふ者なく打過しが阿仙は是より一周の日柄を経て近隣に別を告家の雑具を賣拂ひ故郷へ歸るといひ倣して家を明け茂原の町を立去ると看せ途中より小戻して法現が留守居の寺に入來るに豫て合圖を示し日取旅装ひして待合し阿仙が來るに打連て此荒寺を去らんとする際日三二前に埋葬たる行倒れの旅人の死骸を土饅頭より掘出し本堂に引揚て此周りに枯柴の薪を積油を注ぎ

火をかけたれば焰々と燃上りたる火の手を看かけ阿仙を打連裏路の畔を傳ひ何處にもなく立去たり近村の者どもは出火と看るより此寺に多勢走付稍くに火を鎮めたる焼跡に誰どの知らずひとり死骸全身黒く燻ぼりて僧か俗か更に形像は分らねど是も正しく留守の僧が煙に巻かれて通るゝ方なく此も焼死を遂たるならん此趣きを地頭に訴へ其儘に津濟たり此は是當時天保八を去る十八年前よりして此法現中山お在し頃番山と呼ばれたるを茂原に來りて日浮と號し後に醫者と成りて天公法現と自稱せりとぞ去程に奸僧淫婦の上總を去常陸に走り又下野より奥羽を経る途中の旅費も充るお彼中山よて看習ひし加持を言立日蓮宗の祈禱者なりと觸込て病家に便り或時は難病療治の醫師と稱し草根木皮を行李に貯へ病家も勘たその病人に服用さし後に多分の藥料を廻賣り謝禮を迫り其偽藥を賣りて世を欺き旅を渡る野郎と唱ふる奸商もをさく

第七唱

劣らず旅より旅を経過る事十年餘り今は年經て其面部を看知る者も無からんと七年以前江戸に立出小石川原町に借家して難病療治と看板に詐り多き山醫の立關妻の阿仙に旅寐の頃授けし針治を業とさし妙仙と名乗らしつ武家方杯へ出入らす中に中野が妾の阿美世が方より招きに應じ夫よりしばし立入て遂に得意となしたり

却説中野が愛妾阿美世が産の兒石丸と名付しは常才あがら癩病の萌芽ありと看認しかば石翁最も疎ましく用人山本三太郎と密に謀りて何方へか養育金を差添て親知らずには遣はすべければ其昔人を尋よどの内意を得たれど三太郎は阿美世と従前譯ありて彼産の兒は我胤と思へば阿美世に此事を告ての後又計らひなんと其日石翁が大御所より俄の召よ西城へ出仕せし留守を幸ひ阿美世が部屋よ

入浸り額を交へて石翁が内意の始終を物語るに阿美世のさこそど  
 打案じ三次郎に答ふるやう最前殿と足下の密談必定和子のの上なら  
 んど推すに違はぬ母子の離別室の殿の胤ならぬ足下と妾が情を凝  
 らせし彼石丸が難治の症育つに隨がひ身の中の腐れをしなば如何  
 ばかり名醫の治療を受くるとも癒るに難き天刑病所詮手許の養育  
 は出来まじと此日頃ひとり心を苦むる思ひ溢れて口に出で去年よ  
 り當家に入出入する女針醫の妙仙が本夫の天公法現とて難病療治を  
 専門に業とする者と聞き彼妙仙をもて問合しに彼天公は癩病を  
 治する醫術を収めたれど其方法は容易ならぬ得難き一薬を加味は  
 ば配劑するとも効なし自然ろの一薬を得て家傳の方に調し合し服  
 用させなば彼難病は立所に治するものと保証なりと言たりとの通知  
 なれば足下密に天公に立越法現夫婦に對面し金の入費に感ひ無け  
 れば其一薬を尋ね求め和子に用ひて難症の癒るを頼まて給へか

此事殿に洩ぬやう計ひたまへと托せしかば三次郎は異議なく諾ひ  
 絶し契りの夢結び逢瀬の首尾を侍女等に覺られまじとるゝに  
 此別荘を立去りて駿河臺に歸邸し翌朝小石川原町なる天公が方に  
 忍び行き石丸の難症を愈す奇薬を求め方策を夫婦の者に依頼し  
 かば法現頼に承諾て彼奇薬を他方又求むる數日の旅行入費として  
 金三百圓を三次郎が手許より受収め旅の用意に取懸りぬ(話説兩頭)  
 行暮て木の下蔭と詠出し花の宿りの夫ならで春まだ寒きさらき  
 の梅綻びし襪の問肌もあらはぬ吹酒す夜風を凌ぐ枯木の枝木の  
 葉に煙る野臥りの焚火に合す汚れ面此處は麻布の暗闇坂木蔭にこ  
 ぞる乞食の三個口には入らぬ酒樽の菰を滑團の飯桶枕眠られぬ儘  
 燃さしの火を穿起し語らふ贈答コレ上總ヨ汝は支体も健康なやう  
 だが何で乞食をするのだ歟此方徒は去年(天保七年)の大飢饉百文で  
 二合八勺の米の飯が口へは入らず女房子供に鱈のから脂喰せかね

る困窮から細い家業の資本も摺古木摺鉢無間のひる飯に賣られる  
 どころで無く朝夕思が乾あがるので稍く五才の女の孤兒を抵當に  
 三兩借た高利の金も利に利が加はり返濟方が付かぬので女兒を娼  
 廓へ禿も賣つて取立られた口惜さと貧苦に愚妻は氣が違ひ近所の  
 井戸へ身を投て死なれた揚句に此身の長病死もやらす活もやら  
 ぬ露の命を繋ぐ爲一文二文の袖乞が身の養生に成つたのか此頃病  
 氣は潔り癒り健康も成つたが資本はあし乞食を三日すりや忘られ  
 ぬ喻へでうかく物貰ひ暑サ寒サの苦みを凌いで行もはかぬへ事  
 だオ、牛込のいふ通り誰も乞食は好みはしぬへが己の乞食に零落  
 たも少し子細のある事だマア聽てくれと傍邊の枯枝取つて消か  
 る焚火の中にさし入たり

第八唱

當下上總と綽號する壯き乞食は燃燐る焚火に兩手を打撃し牛込と

呼ぶ同徒に對ひ己が出生は上總の東金親父は土地の小商人茂原の  
 茶屋の女に惑溺七歳の己とお袋を置去にして女を連出し東金を亡  
 命して長南へ隠れ住置去されたお袋は里家へ歸つて病死の後祖父  
 祖母の手に養育られ十二の年に九十九里の網元へ丁稚奉公十五の  
 年暮も懸先から取立た五兩の金で傀儡女をタツタ一夜買たが放蕩  
 の皮切で毒を喰はし皿迄と二三日の流連に五兩の金は残り少な所  
 詮親方へは戻られぬ金の引負一層是から東金の親父を尋ねて談合  
 せんと路次を變て彼處へ立越便る親父は八年以前難病重りて此世  
 を去つたが其實は茂原から連出して來た阿仙とやらが近邊の空院  
 に逗留する祈禱者の法華坊主と姦通あひ大病人の己が親父を殺  
 して逃た後彼奴等の悪事を誰となく言觸らしたので領主の詮議ふ  
 たりの行方を探索されたが未だ知れぬと初て聞憎さも悪い坊主と  
 阿魔何處ぞで廻り逢たなら親の敵きと名乗つて討たうと旅から旅



を經り者路用儲けが惡事の種持道中稼ぎの護摩の灰厄坐同徒に加  
 入ッて街道筋や旅舎の枕捜しが重る科八州巡吏に召捕られ江戸の  
 奉行へ引渡され石川島の人足寄場で三年三月を勤めあげ去年の暮  
 に赦免に成ッたが道中稼ぎが我等の本職田舎へ出かけて一と稼ぎ  
 と思ふ矢先へ便毒が腫出しあぢれた瘡の骨がらみ動きの取れぬ支  
 体とあり據ろなく足下輩の同業に入たは當正月頼て身体が癒ッた  
 ら右や左りのお旦那様と一文二文のはした錢喰餘しの雑炊飯で地  
 上へ頭上へ擧らぬへ了節而て和主が乞食とまで零落たは如何ぞ九  
 譯と問れて赤坂膝摺寄せ已も汝等と表込の田樂味噌を塗たは素人  
 の白痴賭博が身の持病四五年前まで赤坂の一ツ木町で居酒波世稼  
 ぐに追付貧乏陶器で出ると取られる丁目の半間一合二合の樽酒も  
 辨で量ッて笑で蹴す利益も足らぬ戦争の敗軍續けに手足のあろか  
 首も回らぬ火の車修羅場の苦艱を凌ぐ爲小石川原町で難病醫者と

新禱を兼た天公法現といふ日賦貸からかアを借入二十兩借た其  
 晩追目の賭博に殘らず取られ返済の期日が來ても返さぬので貸主  
 の法現から彼奴が出入の權勢旗下中野石翁をこしらへて町奉行へ  
 出訴たので返金せねば此身は入牢退引ならず女房を新宿の苦海よ  
 沈め元利共に法現へ返した後が去年の飢饉喰と被るにひとり口過  
 し切れぬ凶年の米の高直の時節柄足らぬ世帯を種なしの棒に振ッ  
 て乞食と迄零落たも身から出た錆とはいへ其元は強慾非道の天公  
 が取立我子を賣ッたり女房が入水殘る此身は野臥りの今の姿も成  
 果たも彼高利貸の法現夫婦らんから和主も天公めも足下の破滅も  
 山醫者の強催促は我等と同様兩個がふたり因果の出合思へばく  
 肝玉が煮るやうだと互ひ此齒切り傍又閑居し上總乞食がコレく  
 今の談話のやうす其法現は藥を劑日蓮宗の祈禱をするとい若哉親  
 父を殺し阿仙といふ女を連出志影を隠した法華坊主の日浮が憎



者と變化たので有めへかどの當推量さういへば女房の針醫は阿仙に似寄の名稱妙仙と呼ぶ古たぬき本夫の醫者の狼ぢいも親父の敵に相違はねへ我等にも妻子の仇三人寄れば文珠の智恵コリヤ能思案が出さうお者と鼎の足や眉間尺額を一つに合せたり

第九唱

去程に天公法現夫婦等は中野が愛妾阿美世の内意に用人山本三太郎より癩病平愈の奇薬を求むる長旅の路用として三百兩を受収め日ならず旅行の用意をなすに妻の妙仙は彼奇薬の何たる由を知り得ねば本夫に對ひて是までに聞も及ばぬ癩病藥何處如何なる土地にて全く手に入れたまふにや心元なき限りにてこそ三百兩の旅費を受取彼薬を求めもやらず路用を盡して寒々と歸りたまはば權家の強執その折崇りのあるは勿論豫て目的のある事歎聞かま欲と問かすれば法現の微笑つゝ我等壯年の折或老醫の話説を聴しに癩病は

難治の症にてたどへ普婆扁鵲が再來し勉て治療を施す共醫し難き天刑疾花果草根木皮の等類能く及ぶべき者にわらず此難病を愈さんおと一奇方ありと雖も其配劑に五万の金以て得難き貴重の一品あり開の云々の物なりと語られしが耳底に止りありしを思ひ出彼品世に無き物にあらねば手術を施し計策を深くめぐらし何處にて歎手に入れて持歸らば其時こそ三百兩の旅費は帳消し千兩金にも有若了簡その一薬は云々と耳に口寄せさし示せば妙仙篤と聽澄まし點頭笑顔慈まなま然る譯あらば早々に出立ありて彼一薬を何處にてか探り求めて目出たく歸宅われ留守は諸方へ貸金の利足の取立針治の業にて下婢を合手に吉左右を待はべらんと促すにぞ法現は三次郎より受取し路金の内百兩を家に残し餘る二百兩を胸巻の内よ収めて其翌日小石川原町なる住家を後よ飄然と足歩み徐りにあが旅の空定をあく立出たり當夜妙仙は戸鎖を堅め本夫が留守の

取締り慾眼は牙て腫りもやらず行燈掻立貸先の利足の日賦の錢勘  
 定に帳尻括る十露盤玉弾く爪の火燈心に他の膏油に絞り糲更行夜  
 半の門の扉を激しく敲くは何者ぞと厨房に舟漕ぐ山出しの下婢が  
 眠りを叱咤覺し戸口に出して何處よりと問ひするに同町の質店大  
 伊勢屋の女房が俄に瘧のさし込て苦痛に慄めば妙仙様に迎人と共  
 に即刻のあ入を願ふと聞かば定得意の大伊勢屋療治の代も中野  
 家に劣らぬ謝物と思ひ込み夜更ながら他ならぬお宅の迎招支度し  
 て一處に参らん先づ此方にてしばし待てと下婢に指揮し門の扉を  
 内より開けば突然と押入たるは大伊勢屋の使丁にあらで垢染し破  
 手拭に頬冠り眼ばかりを光らしたる襤褸を纏ひし怪の曲者續いて  
 三人一度に込入り周章驚くし出下女を二人が押へて携へし荒縄  
 をもてぐるく巻縛り揚るを妙仙は驚きながらも肝太き惡婆の本  
 性弱身を見せじと其場に坐りて憶せぬ顔色和郎達は折角來たれど

第十唱

主個が留守の女住居金錢衣服の貯へては有餘る身代からず貧乏  
 醫者の玄關構へを富有との見常違ひ近隣の人が聞付ては和郎達の  
 身の上疾く去ったが上分別といひせも果すふたりの曲者冠りし手  
 拭かなぐり捨てしばらくれの狸老嫗高利で口を乾あげた牛込の久  
 八と赤坂の五郎助を看忘れたかど左右より面部突付れば妙仙はふ  
 たりが顔を見るより恟り身を蹴へして厨房の方へ逃出しながら盜  
 賊くと大聲立るを追かけて引倒し三人擧つて猿轡両手を捻揚繩  
 束げ其場に倒と踏据たり

再説く妙仙は三個の賊に踏据られ口に手拭巾兩手の束縛飽まで不  
 敵の性ながら衆寡の勢ひ罵詈するべき聲音を止られ眼を張り起上り  
 て猶逃むとするを上總の與吉が襟上掴み後さまに引倒し「ヤイ惡婆  
 め汝に會のは初めてあがら巳の上總の長男で先年汝等の毒手に罹

り殺されし與市は故郷東金に取殘されし遺子の一粒種當家の半  
 個法現こそ日浮といひし法華の祈禱者病氣の親父が目を偷み姦通  
 をした其上に殺して逃たは汝等が所爲と後にて知れた近所の取沙  
 汰長い月日をたづね巡り乞巧と迄零落たも親の敵が討てへ討り生  
 憎主個の法現めが旅の留守とハ殘念ながら十八年の天津風吹返し  
 たる今宵の出會命は己が息の音止る金と衣類は三人山分才、此赤  
 坂の五郎助も汝等夫婦が非道の取立高利の金で泥水へ沈めた女房  
 の遺恨は山々和主ばかり歎此牛込も幼稚へ娘を禿の苦海互ひにう  
 らみの念ばらし理老婆の命ぐるみ屋財有金ひッ浚ひ貧乏人の苦難  
 を救ふも惡事の善根ダサア上總ヨ老婆の息の音止てしまへ一オ、合  
 點だど繩帶の腰に貯ふ切尖竹右手に振揚任他跋多と足摺身動く妙  
 仙が結髮撫むで面部を仰向け咽喉元深く突立れば胸も浪打四苦八  
 苦身を震はして息絶たり此間も五郎助と久入は行燈掲げて與も進

み戸棚引あけ筆筒の引出し長持葛籠手箱の内を殘なく掻探り價打  
 の見ゆる衣類を撰み風呂敷包み押包み有金二百六十五両と錢三貫  
 餘りを三個分持妙仙が朱に染たる死骸と其儘先に引窓の紐に括り  
 し下婢を看返る暇もなく裏口の路次を傳ひ間に紛れて逃失けり却  
 詛天公法現は曩日我家を首途さし中仙道を行々て往來稀る山家に  
 のみ旅泊を求め山村に病人有と聞知れば志願に依て施療なす醫者  
 と言立逗留なし村の景狀を窺ひ中野家より委託の奇藥を心長く  
 求め共素より稀なる一藥ゆゑ手懸りとてもあらぬゆゑ春去り夏を  
 迎ふる頃信濃路より越中の方に過んとして兩國の境なる風吹峠の  
 麓を通る折同行二人の贈禮の父子と見えて六十餘りの質朴なる老  
 人が俄病ひに路傍の草原に打臥たるを十六七の田舎娘が介抱さす  
 に行逢たり法現斯と打看やり其場に子み娘と對ひ身受し所る諸寺  
 諸山を順拜せ父子連父御ハ卒然も不快の容子愚老は加州に所用あ

りて赴く醫業の者なるが幸ひ行李に時へ此薬もあれば診察の上にて施薬なまきまうさんと深切おかしを頼母氣に娘は両手をうち合せ人里遠き山路の難澁父が病苦を幸ひに救ひ給はる活薬師偏に願ふと伏拜めば年に似氣なき老醫の好色野山の風に吹晒さる薬れやつれし女郎花のゆかし氣なるに心ひかれ病人の脈取ながら娘の顔を斜に看やりしばらくありて行李の中より粉薬一貼取出し娘に命じて傍邊の清水を柄杓に汲取らし薬に繼て服用させ俱に看病なしたりき

第十一唱

先頼む椎の木もあり夏木立影汲む水も一河此流れ他性の縁の御恩ぞと袖振合す順禮の娘は悪醫が巧計ともしら髪の親父諸共に法現を伏し拜み何處のお力かぞんじませんねど御深切の御介抱といふ語に繼て病人の胸元押へ顔を上空老人の旅勞れに持病の痼疾が持

込まして此山路で俄の苦煩折よく貴老の御通行よて良お薬を下されたお庇護に功験は忽ち顯れ餘程苦痛が去ましたお有難やと父子の歡喜法現はくく打領き俄に胸のさし込と看過されぬが愚老の職業醫者はいしやでも遊歴中藥箱は持たせねど行李に貯ふ家傳の奇薬用ひたからの少時の間さし込む苦勞は有まいが二三里歩けば再發する容体とおぼしければ又發らぬ内徐々と峠を越て里に赴き近くの村で旅宿をどり脚を休めて寐るがよいシテ足下達は父子連の順禮と看受たが必定立山へ參詣の牌打でがな有らうぞへ愚老も同所へ登山の積り旅は道連同行せうと云に父子は固辭もやらず病人連には幸ひの願ふてもないお醫師の道連爺さん胸の苦痛は如何ぞと問はれて親父は杖突立てイヤモウ今の良薬で潔り氣持が愈つたが後刻に再び痛むとの仰もあれば今の内此峠を登り越し岩倉とかいふ土地又は旅舎も有であらう左様なら先生様徐々お隨行い



たしませうと娘の脊らに笈葛籠を托し法現が跡も引添ひ吹峠の  
 九折腰もくねりし杖突乃の字頂上まで稍く登り詰たる老の坂兎  
 角も歩みはあどらねど此躊躇を法現の心に思ふ故あれば物憂ども  
 せず後なにより前になりて父子に引添ひ頼て嶺上にイみて後れし父  
 子を待合すも此時親父は疝癪の再び繰り返りて木蔭に寄り草原に平伏  
 て苦しむ容子に娘は周章介抱するを法現看返り立戻りて胸先も手  
 をさし入つゝ病人の腹部の動搖を篤と窺ひ眉の皺も浪打よりしこ  
 は先刻のさし込に勝りて激しき苦痛と覺し此凝塊を解かん事我貯  
 への一藥のみ服用ては即時の効ありしやヨ令嬢太儀ながら此峠の  
 に見ゆるたる岩倉どかいふ村里より必ず藥肆店の有あらんさかくば  
 村此醫家を便り一味を求めて來たられヨそ此藥名は云々と腰より  
 墨斗取出し懐中紙を取出してさらくど書認め娘に渡し少時も逸  
 くと促せば娘の笈葛籠脊負し儘嶮岨路次も厭ひなく麓の方に足爪

第十一唱

立息繼あへず走せ下りぬ此時既に申の下刻大陽西の山の端に落か  
 りりたる夕榮も茂る木立に日影を覆ひはや暮なれと思ふ計り法現  
 四方を看廻し看下し人氣のなきに打點頭猶介抱の体にもてあし苦  
 痛の胸を撫るけはひに手をさし込て胸巻を引出す手を病人ながら  
 諸はど覺りて其手を掴みこは何事をなしたまふと咎むる親父を突  
 倒しのりかゝりて首筋を力量委せに両手にしめ付呼吸の絶しを窺  
 ひすまし懐中の胸巻引出し貫目を量りて莞爾と打笑倒れし死骸を  
 引摺行て數丈の溪間へ蹴落したり

親は子を杖子は父を杖とし思ふ旅の空心細道下り坂行途は最早黃  
 昏も暮なれば便りあり曳の山路傳ひに順禮の娘の醫者が指揮の籠に  
 辛くして下りしかば岩倉村の人家を訪ひ稍くにして藥種を問ぐ舖  
 にたよりて法現が認めし書付取出し其一藥を求むるにさる藥名は



聞き及ばずこの聞薬と覺しけれど此處ら透りの僻邑には決して有べき品あらずと抽戻されて本意なくもすおくとして元來し山路にかゝる途中に日は没果て廿日の宵の木下暗父の病痾の氣遣ひしく急げば脚もはかどらで株に跳き伏轉ひ起上りても塵泥を拂ふ間も赤く息繼あへず登る折柄嶺上の方より下山にかゝる人影を暗にも夫と透し見れば彼旅人も間近く進み此方を看やりて聲をかけ其處に來たるは順禮のむすめ子にての無きかど問はれ誰殿と思へば最前のお醫者様そして親父の病氣はと問はせも果ず法現のさればあり和女が籠へ薬を買に行かれた跡餘りさし込が激しいゆゑ思ひ付いた懐中に貯へた金針を取出して一二本痛み所へ打込んだら忽ちに苦痛の去を忘れたうやに愈た容子附いだ眼をばつちり開てモウ是なれば大丈夫薬も何も入ませぬ命の親と愚老を拜み籠へ薬買に遣つた娘が戻り日が没て不知案内の山路ゆる年はもゆかぬ女

の足はかどらぬ上狼などに出逢て牙にかゝるも知れず老耄ても旅功者腹の痛が愈つたからは脚の達者は壯男はだし迎ひうたゝ心も急げば一足お先へ参ります何れ今宵の旅泊は常宿籠の村で出會ますと言葉で逸散走り愚老の脚に古疵あれば急ぎ路次の同行はならず跡より徐々下つて來たが和女はそゝらで親父どのに出逢ぬとは何處やらで歎行違つたで有らうぞと眞顔で語れば娘はうろくそんなら父は痛みが愈て妾を迎へに此籠へオ、下つたは遂今の間三筋に分れた下り道思はず闇に踏違ひ横へはぐれた者で有らう急いで跡を退たなら途中で出會かさもなくば籠の村で落合ふに相違ない今宵の泊り娘子來やれと前に立ち進む後に兎や角と思ひ詫たる少子氣に心い走れど足弱の先立ものは涙にて遅れ勝ある山路の嶮岨閣にも怯ぬ法現の案内に付て下り行ぬ期て毒醫現法は順禮娘と打連て籠の方へ下る途中必定親父の迷ひ入しは此路あらん彼

處にやど徑路の端に立止り眞向ひの方を指さし示し彼處に見ゆる  
 燈の光りに親父どの岩倉の村家と思ひ誤りて此岐路に分入しど  
 覺へたり一度彼處を尋ねて見ん頓て月も出る時刻未寐なれば和女  
 も共にと從へ連草踏み分て十丁餘り進み行に遙に見し火影は人家  
 の設けにあらざ此山の木の下に建古したる地藏堂の檐に釣たる  
 銅燈籠に點じたる燈明なれば法現斯と打見やり纒の路も夜行の  
 草臥幸ひの地藏堂この椽端に足休めあへく娘が手を取り諸  
 共に腰うちかけさせ燈火カチ〜煙管に移したばと薫らしためら  
 ひたり

第十三唱

當下法現四邊を看廻しコレおむす此處らまで尋ねても親父どのに  
 逢ぬの迷ふた徑路が違ふたれ歟但しは麓の岩倉へ下つて旅宿へ  
 着いたの歟必定途中で行ちがひ出逢ぬまど察したか病癪も癒て

歩行にも差支へぬ脚達者さのと勞をするには及ばぬ一吸煙ヤツ  
 て徐々ど麓へ下つて尋ねたら何處ぞに泊つてゐるで有らう夏どは  
 いへど卯月の中旬山路は露氣で肌身が冷る此方へ寄つて夜風を防  
 ぐ屏風に成つては呉ぬかど肩に手を掛け引寄せられ娘は愕り振放  
 し妾の後から麓の方へ下たど仰しやる父さんの在所が知れぬるれ  
 内は心も空で落めさせぬ貴老の此處におゆるりと妾はひと足お  
 先へと襟に下し、笈葛籠を負はんとするを引据てエ、性急かコレ  
 おむす有やうの登りの麓で行あふた父子の順禮病ひに苦む老人の  
 親父をいたへる和女の容貌青葉の蔭の遅ざくら老の眼も春氣が失  
 せず見るは煩腦凡夫の惑ひ年は取つても身の内は何處も壯健な思  
 老が想ひを人里離れし山中の此辻堂ではらさしてと抱すくむる手  
 を無義はなし身をすり扱て襟より飛下り深切めかして附まどひ妾  
 を此處まで連込んで年にも耻ぬ此しだら斯いふ巧みが有つたゆを

父さん迄も欺計ツぞ借の何處へかヤツたのじやサア連て來て戻さ  
つしやれと叫き立たるうるみ聲法現はるせ笑ひへへ、幾干泣ても  
ほせへても野猪狼のその外は草踏分る者もぬへ更ゆく夜半の此山  
奥野倒死する親父が急病救ふた恩義の謝禮と思つて愚老が自由に  
なれば可也強情張つてピンシャンと蛇々馬流ならば一鞭あて乗鎮  
めるのが此方の馬術ならば蹄にかけて見ると帯たる一刀すらりと  
引抜むすたが目前へさし付て威しめるを怖れもやらず年はもゆ  
かぬ田舎者かひない少婦と侮つて白刃で威して迫る共許嫁ある武  
士の妻と定まる心の探サア殺すなら殺さつしやれと覺悟きはめて  
身を突付れば思ふに違ひし少女の大膽此手じやゆかぬと解剖の刃  
物を捨て暴療治と娘を其處に押倒し乗かゝりて帶留の紐解出し左  
右の腕をひとつに束ねてぐるく巻アノ人殺しくと叫ぶ聲音は  
山彦の木魂にひいきて物裏くかよわき力量も一生懸命別返さんと

第十四唱

身をもがけど毒醫が老力盤石の壓に打たれし玉兔既に強姦せられ  
んど齒をかみ鳴らす娘が憤相最も危き其折から地藏堂の破扉内よ  
り蹴開き椽より下に飛下りし一個の壯雄毒醫が襟上うしろより無  
手と掴みて仰向に引返しツ、戻りを打たせ因果車の建石を目的に  
碓と打付られ法現忽ち目くるめきウンと計りにのけ反て其場に氣  
絶なしたりき

毒蛇の腮に罹らんと最も危き順禮娘は思ひ設けず誰人か地藏堂の  
内より顯れ法現を其場に投退け近く進める其折柄廿日亥中の月代  
の山の端越にさし出て木の間を照らすに面部を見合しや、貴君は  
去年劍術の御修行にて故郷の秩父大宮のお宅から何處ともなく  
御旅行なされた謙造さまではおざりませぬかオ、同郷の關謙造じ  
や危い所ろへ折よいお出そんなら先刻から此堂内で始終の動止を

聞取らんとさいぜんから此堂内に潜伏んで居たも和女父子が途中の危難を知ったゆゑ先へ廻りて一筋路の足場をはかりし地藏堂親父どののつゝがなく岩倉村の旅舎に預けて来たゆゑ安心して我等と一所に泊りまで宿は父さんにもお行逢なされましたか如何してアと問を打消し委細の話は旅宿にてゆるく棄置られぬは此悪老引括つて地頭の役所へ差出すが諸人の爲と刀の提緒手ばかり解きて氣絶せし法現が左右の腕をうしろに廻して縛り揚一活入れて息吹返させ娘を先に法現が縛め取つて追ひ立く案内知りたる捷徑より山を上りて麓なる岩倉村の定泊り彼旅舎にぞ着にける乍此壯雄は何者ぞ其出生の武藏國秩父郡大宮在の郷士關三郎次が次男謙造とて今年天保八丁酉茲に二十三性來武道を好むより十五六の頃江戸に走り桃井家の門に入て道場の熟生たるも既に四年神影流の免許を得る日近きに有とて晝夜の間なく稽古に怠りな

しと聞より遠く隔ちし實家の父母の好しからぬ次男の腕立同流他流の試合の上には勝敗の遺恨により決討に命を棄るの弊習あれば能程に道場を去り歸郷せよとしばく我子に音信を送り殊更女親の恩愛深く老人に乞て謙造を呼び歸さんと促し立るに父三郎次は此使節を長男孫太郎に命じ江戸に遣り謙造を迎へさするに此時謙造は今一年の修行に本免許の許可をも得るなれば佛造りて魂ひ入れず遺憾の思へども父母の命の重ければ止を得ず舎兄に従ひ故郷の實家に歸りしを幸ひの足止に同郷の農家福田勘作の壯年代々名主を勤むべき家柄なれば其次女幾野とて妙齡未だ十四なるを許嫁とし家に乞聘順て謙造に配偶して別家させんと両親の慈愛に悖る謙造ならねど好む道とて劍道の極意に至らぬ事のみを遺憾と思ふに予此事を兄孫太郎が許に遺書去年の春家を脱て北陸道に遠く走り此邊を武者修行して越中なる岩倉村に滞留中五六名の弟子

を取立當春假に道場を開きしより此地に停り當日近村に請待され  
 出稽古に起きし歸り道夜に入りたれば隨へ連し當村の門人が小提  
 灯に路次を照らし風吹峠の山涯を進みて登りにかゝる折早瀬落わ  
 ふ谷川の邊りに老人の倒れ臥し氣息の絶しは過ちて此山上を踏  
 り遙の溪間に落たるならん自然蘇生あるもやと謙造は彼死骸をう  
 りろさまに抱き揚手練の活を入るゝと等く息吹返し門人がさし出  
 したる提灯の火影に看合す顔と顔貴老は福田の勤作どの歎さうい  
 はるゝは謙造どの歎と互ひに驚く此場の邂逅この奇遇により法現  
 が悪事の始末も詳細に解り謙造は勤作を門人に介抱らし岩倉村の  
 旅泊に連させ其身は此處より捷徑をたどりて嶺上の枝路より彼地  
 藏堂に潜伏し幾野を救ひ法現を擲めて旅宿に戻しあり

第十五唱

甚麼彼の福田勤作は其家富豪にあらずれど所有の田畑山林も四五

反ありて殊に該地の舊家なれば壯年は里長をも勤めし身にて不足  
 なく夫婦が中に二女を儲け姉を喜美江妹を幾野と呼びて一双の露  
 の玉花にうつろふ風情あり勤作は知命の年名主役を辭し去り姉娘  
 の喜美江には同村本田氏の次男を迎へ聲として家督を嗣がしめ妹  
 娘幾野は又郷士關三郎次の次男謙造に許嫁の約束ありて近きに新  
 婦に送らんと支度中謙造は未だ熟せぬ劍術の本免許を得むとす  
 るに今暫時修行せんとて其趣意を舍兄に遺書實家を去しを勤作  
 が乙娘幾野が聞て我むくゆはく卑きを疎みて家出せしをらむと賢  
 く見ねても小婦氣に此あとを心に嘆ち許嫁の良人に棄られて他に  
 面部を見らるゝも最愛しとて外出もせず小室に籠りて樂しまず鬱  
 々として日を経る中遂にぶら／＼病痾を生じ寐るとはなく不快の  
 氣色に父母の太く案じ醫師を請じて治療を乞にこの神經の煩ひに  
 て一種の病根あるにあらず心に含める憂ひを拂へゝ忽地に快氣す

べしと餘病を防ぐ補ひ藥を授けてさのみ念とせず實同胞の縁みとて姉の喜美江は妹が情を問はず語りて夫と推し或日母親がひとり折幾野が病根は詠造が家出せしに發りしなれば争で彼人の行方を尋ね連歸りて女夫とせば必ず癒るに疑ひなし此事父上と計りたまひて詠造どのを歸村させ婚禮を整へなば關氏なり當家なり双方共に親々の安心ならんと密に告るを母親は實にもど歡喜その夜勘作どの寐物語に此事をうちわかすに勘作も諸はと黙頭詠造が行方を尋ねるには幸ひ年來志願の信心詣越中立山に行を托け坂東三十三番の札所を巡る足つひて詠造が行方を尋ねて見んと老の性急親戚一同に此事を告知らし二月初旬首途の折幾野も父に同行せんと強て所望して止るも聞かねば從者ひとりを伴はんより遂て幾野が心底も老妻より聞知れば田舎の質素殊に又秩父郡は貧福にかゝはらず神佛に順拜の事行はるゝ土地の習慣に怪む者なく父子身輕に

田立て諸國の靈地を廻り來つ此越中にかゝりし折豫て旅路の目的とする關詠造に計らずも此處にて邂逅しなり閑話休題關詠造の毒醫天公法現を其門人に引立させ岩倉の旅宿なる物置小屋に繋かせ置夜明なば當所の地頭に渠が悪事を言立て引渡さんと當旅宿の戸主に托しひとりの番人を附添はせ柱に繋ぎし法現の束縛を守らすに法現は函の内にとぐろを巻く虬の如く縮みあがりて頭上を低て黙然たり此時當家の炊夫老爺六助といへる者老の眼も深更に倦て退屈防ぎに貯への陶器の酒の五合機嫌その場に倒れて醉臥たる厨の音の檻に洩れ法現きつと耳を澄ししばらく動靜を窺ひて結付られたる柱の際に身を摺よせて両の手の束縛を數回拵付老に似氣あき大力に奇つてエイヤと憤發一聲繩ひきちぎりて突立わがり檻に隔の扉を蹴蹴し生体もあき六助の仰向に臥たるを透し見て莞爾とうち笑手探りに傍に在あふ竹竿採つて咽喉元目がけ金剛力に突立

ればアツと魂消る被聲をうち消す雨の震動雷轉天の動と法現は物  
置の扉を内より開き雷雨に紛れて逃失けり

第十六唱

吉原の夜舗をはるの夕暮は入相の鐘と花ぞ咲ける實にや花柳の一  
刻千金妓家おのく門戸を分ち妍を争ひ媚を獻じ勝を闘はし奇し  
きに誇る即ち卯飲淫々蘭湯濫々として衣一室に香しと譜せし金陵  
板橋の曲中は物かは我北里平康の瓊臺將ろの頃ハ舊曆彌生大門口  
より袖わたす一重のさくら咲満て餘處の八重にも彌勝る眺めに添  
し海棠の眠た氣なるに山吹の口あし色もこきませで遊廓ぞ春の錦  
の裡裾見わたす中の全盛娼妓は箱提灯に扇屋の若紫とほのめかす  
伽羅の薫りに紅裙を蹴あげ江戸町の娼家を出て由縁の客に七軒の  
茶屋許進む駒下駄の歩みしづけき道中姿但見る盛粧飽服の光彩往  
通ふ人の魂ひを動かし一夜紅箋許して情を定むる者何處の大盛ぞ

後朝別れを惜みて翅駕の走るを恨む者何れの情夫ぞや茶屋が樓上  
の報間藝妓は纏頭幾片の黄花に潤ひ富める者は送り提灯を前に立  
たし貧きは水道尻の東西をぞめきて素見地廻りの名に止り色界お  
のづから目前の盛衰あり且說中野家の用人山本三次郎ハ叔母甥な  
がらう此年もよき權衡の同年出生阿美世と共に駿河臺なる中野の  
邸内に有し頃忍び逢しと一二度成しが阿美世が唯ならぬ身と成し  
と聞て心に打驚き如何はせんと相談の暇問さへなき人目の關互ひ  
に心中安からず墮胎の工風をめぐらす折僥倖にも石翁の手出しよ  
あはよく捺付し出生の子石丸は因果の惡血滯はりて性質癩病の症  
あるを石翁太く疎むより阿美世はいかで此難症を治する奇藥を求  
めんとて去年法現が妻妙仙に勸められ彼一藥を求むる旅費三百圓  
を天公に授け密に法現を田立させしが天公が小石川の留守宅に或  
夜盜賊忍び入り妻妙仙を切害あし貯への金衣類數品を掻浚ひて逃

失たる由疾くも三次郎が耳に入りろの本夫には依頼し大事あるに  
 心も安からず此變災を渠が許に告知らせたく思へども行方定めぬ  
 旅の空何處にあるやも分たねば如何もして其行先を聞山らんと妙  
 仙が妹何某は新吉原の廓内に樓婆となりてある由ほのかに聞しを  
 思ひ出し先其者を尋ねんとて風を捉へ雲を櫻むのたどへに似たれ  
 と縊に五町の園を出ぬ遊女屋の大中小雑局長家に至る迄探偵なば  
 めぐり逢ふ機會もあらんと夜櫻の見物あがら下役ひとり誘引連て  
 吉原の廓に立入咲揃ふ花のながめも餘處にして五町の巷を此處彼  
 處唱家の櫓に立淀み格子の内をさし覗き便り宜と見認し家に登樓  
 せんと躊躇たるに當夜は花開きの當日にて惣半籠小格子の遊女の  
 大半賣切て何家も樓上賑しく客の山なす雑沓に妓夫も門邊に客を  
 曳く暇間さへなき大混雑とい興なしと角町より仲の町に立出るに  
 此時江戸町の方より仲の町の茶屋に赴く遊女のけは平凡ならず夜

第十七唱

目に夫と判然ならねど妖姚として見る目眩く三次郎は同行の連  
 をも厭はず先走り進みて彼妓を親く見やるに年齢未だ廿歳に満た  
 ず遊女三千一廓中に又有まじき艶麗ありと恍惚として思はずも跡  
 に引添ひ浮架くと茶屋が櫓まで附ろひ行きぬ

庭中の梅花は樓上の櫺子窓より香を送りて名代座敷に獨臥の嫖客  
 が心を動かかし長廊下を通ふ上草履の音は更闌る程耳に逆ひて狸寐  
 の腹鼓おのづから劇し廣間の大一座に男女藝妓の舞唄ひも毫的房  
 への機會に解散し次の間に舟を漕ぐ振袖新造は禿の兒女畜猫の於  
 兎と併びてさながら豊鑑の三睡に似たり亂食の臺の物は白鳥の空  
 陶器と共に廊下の往來を妨げ遙に掌中を鳴らす者ハ西國訛りの藩  
 士歎醫師に化た僧侶歎仲の町行の二等新造脚樓の遅きは魁妓の用  
 事に托きて裏茶屋這入の魂膽ある可し表格子に簾を下し舖の大扉



に鎖しする丑下刻按摩の中田の時に歸り待合の辻の水鈍屋は七輪の火を濕し咲誇りたる大路の櫻は露に俯むく花街の深夜廓に聞えし流の水原江戸町壹目之妓美が爺五明樓(扇屋)の全盛遊女花扇が突出しの若紫とて春は年と飽を同うし花は月を推して盟を主蛾眉後輩亦く蝶夢是前生と自由燈の記者當時わらば筆を揮ふて賛評しつ可く此花をある今宵のあるじと戀の山々三次郎は穿鑿すべき秘事あるも宵に彼妓を仲の町にて不圖看初しより我をも忘れ同伴の下役吉田鉄彌を誘ひ勸め豫て鉄彌が知己の茶亭和泉屋忠兵衛が方に至り該家より案内せられて五明樓に登り行三次郎は彼若紫を對妓に所望なすに今宵は狎の客落合ひ本間のふさがり名代も四五名あれば待遇も自から魚末にいたらん殊に初會知己附金の入費を厭ひたまはずば兎も角もしてまゐらせんが夜も更けたれば他に美き魁妓にて本間のあるをお媒介まうし上んと茶屋が詞を打消して是

非に彼妓を聘へたしと強ての所望に否とは言はず諸事賄ひて對妓とし酒肴の供へ見番の藝者一ト組形の如くひけ過なればそこくと座敷を切揚同伴の鐵彌は中座舖張の遊女を對妓に圍房に移し三次郎の素よりの約束あれば若紫の名代床に案内しつ後は新造等に委任せ娛機嫌よりの乗ことば茶屋はいそぐ立歸りぬ斯て山本三次郎は豫て覺悟の名代座敷所詮今宵は獨り寐の床に残り一移り香をせめて紀念と觀念しはやくら夜具をうち被ぎ虚寐にあらで正夢を結ばんとすれど眠られず現々として潜まる折柄上草履の音もかく廊下前の障子を密と開きて徐に次の間に入來し者は先の程何處へか出行し番新の歸り來かど手をさし延て枕邊の屏風少く押開き頭上をそためて次の間を透し見れば豈計らん夜明るまでには其顔を看るに難しと思ひ絶にし若紫は重やかなる重ね草履を右手に提げ次の間の隅にさし置醜女火鉢の傍邊にひれ伏眠りて性体なき

第十八唱

振袖新造を揺覺し耳盪出さし眞鍮の嗽ひ茶碗に口そゝぎ鏡臺に寄  
り亂れし髪をそこく取揚つゝ其儘立て本間に進み屏風開きて  
内に入りオヤ未起てお出あんす歟と蒲團の端に身を据たり

吸附け煙草の火に依て初會の客の面部を照らすは瞳の闇に魁妓の  
業衣服の善惡に懐金の貫目を試み番新の職色即是空々即是色傾城  
に實なしとは契情に虚いふ客やいひはじめけん虚中おのづから實  
あり實り虚を表する者妓院にありて入來る人の知らざらめやはと  
地獄太夫が一休禪師に應答の下句詠得て可也即說山中三次郎の所  
詮今宵は逢ことこの絶てあしと斷念し對妓若むらさきの計らずも入  
來りて親く比翼に併びしかば夢かど計り心の歡喜客の青年一個の  
好男又對妓も月中の嫦娥に比する一香君懷中の嬰娜袖中の藏けふ  
は如何なる吉日ぞ初會の枕その待遇も疎からねど武家に仕ふる規

則を亂さず夜明を待たせど約束の茶屋が迎ひに起出れど残り多き  
は春の夜の看果ぬ夢を次會約束に誓ひて未だ起出ぬ吉田鉄彌を促  
し立歸るに臨みて三次郎は座敷の内を看廻すに鏡臺手函小櫃の類  
ひ夜具風呂敷に染ぬきし紋所は山本が衣服羽織の紋どおなじく丸  
の内に櫛なれば互ひにこれに目を止め殊に三次郎の彼風呂敷の端  
に染ぬく山本の二字にますく不審を生じさるにても此娼妓の其  
紋所も我とおなじく又山本と目印あるは必定渠が苗字ならん歟或  
は深き知巳の客の紋と苗字を用ひし者かど心に懸れど初會の歸路  
打つけに問もあられねば寝惚顔して對妓と共に入來し鉄彌と等く櫻  
上を下りて大門口に待たせし翅鷲に乘移れど廊内の方を見歸り柳  
吹戻さるゝうしろ髪お近い内に左様ならど茶屋が送りの詞を聞棄  
二挺の駕籠はわけばのゝ空を背後に日本堤を大音寺の方にぞ走く  
たりぬ是より後三次郎は若むらさきの紅圍の移り香身に染つきて

忘られず次會三度目どうち續け今は鐵彌と同伴も物憂しとて唯獨り通ひ馴たる五明襪の若むらさきも三次郎が男ぶりなら金銀の散ぶりも良き客と見て勤め離れし待遇に氷人煙花の種を斷ず愚魯しからぬ山本ながら若氣に進む戀の淵溺れかけては止まる瀬なく若紫も此人と思ひ定めて深く語らひあかし合たるさしめ言に過日初會の後朝より心にかけてし橋の我におあじき定紋と且風呂敷の端に染たる山本は我苗字とこれも同じくきかま欲きの和女の實家その父母は如何なる人かど問はれてしばし耻らひしが投の情を賣るのみならず身の生涯を此人に托ねん者と思ふにぞ若むらさきの膝すり寄せおはなしまうすも耻かしながら妾が實の父親は元下總の船橋生れ其處の旅籠屋何某の長男にて家を繼べき身て有ながら引いとりの放蕩過ぎ他人の金錢を虚言いふて引出してつかひ散らし妾が實の母さんは同釋で賣女の身を馴染合て密に連出し實家の親に

大層奇迷惑をかけたので久離勘當人別も帳消と成つたゆゑ生れ故郷へ足踏ならず江戸へ出てからさまと憂難も不考の罰際物渡世のしがない活計稍く硝子の細工を習ひ淺草幡隨院の門前で裏家住居のびいどろ職入その内に賣女あがりの母さんが妾を産十五年の貧い世帯一昨年の秋父さんが熱の病ひて長の煩ひ母子ふたりの看病の手は有あがら貯へもなき明しても工面ならず常々父さんの談話よゝ當時大御所の御愛妾阿美代の方と仰しやるゝ現在己が叙母又當るお方ながら義絶の身の上合力頼むことも成らねば若い時の不品行もえと聞さへ悲い親子の身の上細い煙りも立かねて親の因果が子に報ひ愛川竹に身を棄て浮かむ瀬もなき三とせ越推量してと計りにて伏沈みたる若むらさきが話しの切目を聴たびく或はおどろきあるひの呆れ正く實の我姪にて先年父に勘當受し實兄の一女で有りしかと思ひ合して紋所ろ名乗あねてぞ猶豫た

第十九唱

當下山本三次郎は若むらさきが経歴の始め終りを聴すまし我に覺えの談話の手續き儘に此者は吾幼年船橋の實家を去り行方知れぬ實兄の清兵衛が滄浪中妻に産ませし一女ありし歟我こそ和女の實父が舍弟と名乗らんとせしが待てしばし癩には父の妹にて我爲には正き叔母の阿美世と怪き契りを結びし邪淫の後悔それさへあるに知らぬ事とて又茲に現在姪と深く語らひ賣色はあれし二世約束まくらの敷を重ねて畜生道に誘引はれし血統統統叔母と知り不義姦通せし天罰の忽地めぐりくるわの應報因果靦面あき怖し今愁ひに名乗もせば渠が氣色を損いんと己が素性は詳細に語らず唯中野家の用人を勤むる由の前にあかし若むらさきも豫て知れば實家の深く秘みて告ず其定紋と同苗なるの奇遇といへど世間には伊

藤家の庵に木瓜渡邊氏の三星一字その類多く奇しからぬと和女と我等の中にして此對あるの宿縁の深きしるしと覺えたり杯言まぎらして其夜は睡り翌朝未明に立歸り詰所に在て唯ひとり廓の景状の忘られず若むらさきの移り香のさめやらぬども只管に心にかゝる前夜の談話との一事より心中に獨りつらく惟ふやう傳へ聞く男女同胞の交りを國家に堅く禁ずる者の同種の血脈相混じ其中に産する兒は生れながら毛髮肌膚ともに白くして潤澤なく成長に隨ひて面部及び全軀の皮肉腐れ變相異跡人外の症と疎まれ世に天刑の病名ありとぞ夫かあらぬか我漫に若年の前後みず因縁づくか阿美世も共に煩惱の犬となり血統を混ぜし報いにや主翁にかづけし二人が中の石丸こそ癩病の萌芽と見ゆる平常の容体此難症の良薬は稀にも世にある物と聞き癩に天公法現又旅費をもたらし搜索に出しやりしが其留守中妻妙仙は強盜の刃にかゝりて暴殺されし

が渠等夫婦の行状を後に仄に傳へ聞けば俱に舊惡ありし者と耳に  
 入る程安からず斯れば天公も彼一藥を求めて歸るは覺束なし我も  
 中野家に仕へて阿美世が手前を憚れば若むらさきに逢途て夫  
 婦に成らん最難く殊に叔父姪の名乗をささば渠が父の正き我兄  
 に其處此處忌多き彼と我とが身のつまり此結局は如何やせんと一  
 時に迫る心の愛苦鬱々として在し折柄門番老父が一封の書翰を携  
 へ詰所に來たり唯今何處の者とも知らず此一通を門番所へ投じて  
 去し宛名を見るも中野家にて山中三次郎様淺草よりと記したれば  
 取敢ず持參せりと差出すを受取て封じ開きて讀くだせばあは若紫  
 が自筆の信書にて實父が病死の云々の訃音あり廊の圍を出るに難  
 き籠の鳥あそ痛ましけれ疾行て動止を問へんと日暮を待て邸を立  
 出八辻が原より翅駕を飛ば志狂ふ意の馬道に懸る猿寺ましらの叫  
 び田町通りを一散走り堤に登りて下り路衣紋つくろふ見返りの柳

の下よおろせが息杖恰も好と三次郎は此所より駕籠を下りぬ

第二十唱

邯鄲旅亭の宿りにあらで一時榮花の夢見草人間縋か五十間道は一  
 筋三曲に踏出す後の翅駕簾垂刎除て半身頭はし大門さして行かん  
 とする三次郎が佩刀の鎧捉へて後へ引戻され思ひ懸ねば振返り何  
 者なる歟と透し見れば黒縮緬の高祖頭巾に面部を覆ひし武士扮且  
 身に兩刀は帯たれど着流す羽織もしどけなく媚く姿の不審しけれ  
 ば猶さし寄て容子を見やるに彼者は猶乗物の内を離れず右手をさ  
 し延べ突然三次郎が胸づく一掴みて傍へ引付つゝ左手に頭巾の結  
 びを解き半面あらはす美人の女相親く見れば豈圖らん男姿の武士  
 扮且も是なん阿美世が變裝されば驚き怖れて其場に躊躇頭を土に  
 摺らぬばかり此時阿美世は往來繁き餘處目を憚るしのび巖三次郎  
 どの此頃は取分毎夜の遊所通ひ須崎村と駿河臺路次は隔てど天に

口あし他の噂が耳に入れど投の情けを賣物の傾城遊女に現を扱し  
 我を忘るゝ和郎でいよも有まじと疑惑晴れねば虚か實を見定めむ  
 と今宵は御前石翁が西城へお夜詰とて午後より御出仕を幸ひに男  
 姿に扮旦て日暮方より翅駕に乗り此看歸りの柳の下に待とは知ら  
 て待さるゝぬしの妹計通ふ和郎の姿駕籠より出ての急ぎの路次を  
 妨かたも御前のお留守に今宵を限り俄に相談せねば成らぬ秘密の  
 はなしがある故に定めし的妓が待つてい有らうが遊興の夜更の娛  
 みに残して今うら妾と同伴に向ふ島まで連立たまへと内心如夜刃  
 の嫉妬を隠す外面菩薩の和しき口頭心刃を合むと知れど身の放  
 蕩を看認られ何と分疏ことばも無ければ面目なげ首少しくもたか  
 然らば是より随従まうまゝん貴婦のお駕籠は此儘に拙者は別に大門  
 口よて雇ひて乗らんと阿美世が駕籠昇來し者に誂へさせ二挺前後  
 に昇揚さし日本堤を東に向ひ須崎村なる中野家の別荘さして走歸

りぬ技に亦三次郎が下役なる吉田鉄彌といへる者その父の素中山  
 知泉院が寺侍ひにて父母共に世を去し後孤子と成たるを當時八幡  
 の別當所(守玄院)に小姓として召役ひしを後に山本三次郎が舊情の  
 吹擧より中野家の徒士と成しが此者の性阿諂を専らとし狡猾くし  
 て好才あり且色を好み酒に狂ひ平常品行善らねど阿美世と三次郎  
 が姦通の動止を巖に窺ひ知り其内情に強て立入彼是と周旋するを  
 三次郎は物憂も最うるさしと思ふものから阿美世は渠がまめやか  
 に仕へて阿諂退從のおとばを信じ秘密の事情はあかさねど先服心  
 の者として石翁が前を執成みづからも亦愛顧してよりく物など  
 どらせけるが先頃三次郎は妙仙の親戚の者を尋むとて鉄彌と共に  
 吉原の五明樓に遊興し後四五度は同伴せしが深くなる程連り邪  
 魔と世の俚言も音ならず若紫の三次郎の毎度の一座鐵彌が酒癖最  
 わろく殊に情夫の山本が懐金のみを目的とし自身出金せし事なき

を想像と疎ましく且その對妓も鐵彌を厭ひ歸りし跡に盞花を撒く程憂き懷を汲み密かに三次郎に忠告し向後通ひたまふ折は鉄彌ぬしは省きたまへと針を刺され其後は鐵彌に秘して一個しばし通ふ内邪智深き鐵彌あれば斯と知りて不快を抱き彼奴は恩ある主人の妾の身の爲には叔母にあたる阿美世と姦通せしことを疾くも知りしは此鐵彌の口塞げの鼻藥に遊廓通ひの入費を賄ひ我等が爲に散財の嵩むは自業自得の罪然るを性の吝嗇なるよりある頃は我に秘しひとり密に通ふる腹きたき男かな良もさあらば此方もろの氣彼奴が賈娜に心を奪われ夜毎に邸を脱出し遊廓通ひをさす由を阿美世に告て紛紜の種を蒔かんと獨り黙頭或日石翁が登營の留守向ふ島の別荘に訪行て阿美世に謁し三次郎が遊所通ひの云々を問はず語りて告聞こはさまし諷言なしより阿美世は嫉妬のほむら熾んに自身吉原の衣紋坂まで出向ふて三次郎を待合し出

第二十一唱

會と齊く須崎村の別荘に連戻りなり

三ツ栗の後妻打や角隠し阿美世は當夜三次郎を隅田の中野が別邸に伴ひ歸り石翁の登營の留守は叔母甥の親き中とて侍仕の女原にも憚かりなく己が居間に打通し内談ありとて侍女の近接者を堅く禁じ四方を窺ひ三次郎を遶り近く打招き思ひあり氣にいへるやう和郎が今宵の遊興を妨がるに似たれども言ひねは成らぬ親戚の縁故きみ傾城に心を奪はれ夜毎遊廓に入浸りて本務を忘れ又外に托ねし和子(石丸)が身の上を等閑にして看返らぬ頼母氣あき和郎とも知で頼みし妾が鹿忽他に洩らさぬ和郎と妾が忍び逢より時そめし愁ひの種の石丸が難治の症を毫思はで傾城遊女に現をぬかし主家を始め妾母子を看棄る心か聞かま欲しと詰ることばは胸に釘打るし思ひ暫らくいさし俯きて返答あきを阿美世は猶も急立てまな

じり釣わげ身を震いし此程いふに答無はいよく親身の實を失ひ  
 妾に誓ひし初めのことばに反く心かあら怨めし親同胞にもあかさ  
 れぬ親戚同士に怪きゆにし結びて擧げし和子石丸よしや其名の主  
 家來の差別のあれど其實は我身の胤と知りあがら詐り多く實なき  
 遊女に見替られたる妾此後誰に打わけて頼む方なき和子の難病生  
 甲斐もなき母子が身の上いとしと思ふ石丸をも刺殺して妾も共に  
 死ぬる冥途の道連に和郎の命も貰ふたぞとさし俯きし三次郎が肩  
 頭取ッて引起し左手に胸ぐら無手と掴み秘し持たるし首を右手に  
 引抜き刺さんとする氣色に堪らず其手を捉へ思はず聲を高くして  
 はやまり給ふな其お恨怨深き動止を知りたまへねば唯一ト筋の遊  
 女狂ひ鬨ぐ情に溺れしかと思し召の無理あらねど是にはだんく  
 仔細あり先ひと通り語るを聽て我詐欺とおぼされなば此場に命を  
 とり給へしばしくと白刃をもぎ取りはやる阿美世を抱すくめて

面部を近くうち合し仔細とまうすは他ならず我等が遊所に連ふこ  
 ど色に溺れし放蕩の亂行にて候はず實は先頃強盜の爲に慘害せ  
 られたる天公が妻妙仙が妹何某今吉原の遊女屋に雇はれ在どほの  
 かに聞知り彼妙仙が本大法現には大金を授け内事を托し旅行さし  
 たる行方は何處と知らねば妙仙が妹に便りて窃に問はゞ其方向も  
 分らんかと吉原町に忍び行き此處彼處と心當をたづぬる内に夜を  
 更にし同伴なしたる鉄彌と共に扇屋の樓上に宿り不圖對妓となし  
 たる遊女若紫といへる者は貴婦も少しの聞知りたまはん先年我父  
 市兵衛の勘氣を受け家出せし舎兄清兵衛がひとり女名乗あひたる  
 ろの原の渠が夜具風呂敷を覆ひたる丸の内に櫛の紋所とその端に  
 染抜し山本の文字より同姓同紋の奇偶を怪み渠が素性をうち問て  
 叔父姪なるを知るからに一夜遊興と夫限り看棄もならぬ血統の縁  
 兄清兵衛夫婦の零落ひとりの女を苦海に沈めし貧苦の始終聞くに



第二十二唱

忍びず一掃義絶の兄ながら素より骨肉同胞の切るに切られぬ故縁  
 より餘處ながら實兄をみつぐ拙者が心庭にて毛頭色情あるにあ  
 らず此儀を推し給はれかしと實言虚言うち混て種々詞を盡しける

偽りのなき世なりせば如何ばかり人の言葉の嬉しからまし阿美世  
 の一途に張つめし怨恨の念も三次郎が説解あそばしに覺ゆる其身  
 の爲にも従弟同士なる山本市兵衛が長男即ち三次郎が兄清兵衛の  
 娘の許に通ひしは色に溺れず零落の兄を貢がん素心ありとの分疏  
 は道理あれど已が身にも覺ゆるある男女の道は思案の外たどへ叔父  
 姪の中なり共我身の正く三次郎が叔母の身ながら忍びあひし比例  
 もあれば全くの色情ならずと定め難かり猶疑はし此事も期に迫り  
 し遁辭にやと思へばなかく怒りを収めず掴みし胸藏放しもやら  
 ぬを引放さんと争ふ機會三次郎が傍邊の小夜具の内に臥せしめた

石丸が足のあたりへ突倒すに餘念なく睡り臥したる幼児は此に  
 駭き覺てワツとばかりに泣叫ぶと三次郎は周章ふためき石丸を抱  
 き揚掲りて悲鳴を止むる体には有業の阿美世も怒りを壓へ背後を向  
 て黙然たり此時幾間か隔ちたる侍女局に遠避られ阿美世と三次郎  
 が密談の畢るを待し乳母繁野は遙に石丸の泣叫ぶ聲聞付て思はず  
 も次の間まで走付しが談話の間此席に來るまじ用談をはらば驛  
 路の鈴を鳴らすべきにどの命もわりしを未だ鈴の音づれなきに慢  
 りに入らば如何なる咎めや蒙らんと襖越に躊躇しを阿美世は斯ど  
 聞耳立て其處に來たる何者ぞと咎むるあそばしに乳母繁野はつ  
 と其場に身を屈め参りしに繁野に今女中部屋にて和子さまのむ  
 づかり給ふ御聲を聞付け我を忘れて先刻の命を反き走付しは和子  
 大切にぞんせしよりの鹿忽なれば免させ給へと詫れど阿美世が邪  
 推の想像渠は斯と遁辭れど最前より三次郎と妾が密話争論し纏の

願末まで立聞せしに疑ひあしるの身の上の一大事と思へば心中安からねど素知らぬ振にて繁野に對ひ和子は夢にや歴れけん俄に覺て泣たりしを三次郎がすかし和め再びすやく睡りたれば初女に此處にて添寐せよと言さして三次郎の方に振向き未だ談話は盡ねども夜更ては歸途に物憂し翌は服にも早朝に退出わらん其折に今のはなしの云々いよしきに執成まゐらせん今宵は更て大儀ながらよからぬ場所へ寄道せず急ぎて本邸へ歸りたまへと繁野が前をいひ紛らせど目に角たちし詞の折目三次郎の退く足のよき汐時と幸ひに暇乞して其座を退き侍女等の案内に附番侍ひに送られて潜り門より戸外に立出で隅田堤の閑路をたどり心にかゝる村雲の雨持つ空をうち仰ぎ吾妻橋を西に渡りて花川戸の地藏が辻を過る傍への路邊に客待したる辻駕籠の勸めはよしや吉原に誘ふ水とていあみもやらす價を極て乗移りぬ

第二十三唱

却説阿美世は三次郎を出し遣たる其跡に獨りつくも思ふやう今宵三次郎を大門外より引戻して連歸りし日頃胸に疊みし渠が無情の仇し心をいひ懲さん爲なりしを石丸が乳母繁野めに妨げられて充分に意をはらさぬ残念さよ开は又後日に延るども棄置難きは乳母繁野妾と三次郎が贈答し密話の趣旨大畧は次の間にて計らずも立聞せしに違ひなし妾も一時の怒りに委かし思はず聲音を高くして和子の睡りを覺せしかば其泣おるを遙に聞つけ走來たりし乳母の職務近く此場に臨みしとて咎むる理由はあしと雖も聞かれし話の一大秘事此儘にして棄置かば三次郎はいふに及ばず妾母子の身の破滅兎角さかき女の口これらの秘密を傍輩の侍女ばらに傳へもせば遂に殿の耳にも入り日頃深く忌きらふ癩病萌芽の石丸は我胤ならずと覺りたまひ之を幸ひの罪として放逐はれむは必

定なり斯る愛ひを拂はむと如何にやせんと途ッ追ッ思案に塞が  
 る胸の悶僻める女の性として身の禍災を擧はんと忽ち心も鬼を生  
 じ手箆筒の引出し密と開て取出すし首の鯉口くつるげ四邊を窺ひ  
 己が寐所を徐に立出かたのらの小座に石丸の添寐せし繁野が寐息  
 を聞すまじ馴の高きは熟睡のしるしと枕邊の行燈を遠く退けし首  
 の氷の刃扱はあし石丸が傍邊に前後も知らで打臥たる繁野が上に  
 乗ると等く咽喉元深く刺貫けば苦と一聲叫びもあはず魂消呼吸に  
 耳聾て獨るぐりつけく全く息の絶しを看認脱捨ありし繁野が常  
 衣に何とばしりたる血汐を拭ひ退け置し行燈提寄せ蒲團の中に自  
 害せし舉動に体裁を取繕ひ己が合首はあし隠し繁野が傍邊には石  
 丸が常に佩しし小刀に血を塗らしその身は次の閨房に入り素知ら  
 ぬ振に打臥たるを知る者絶て無かりけり  
 迷故色界の情ほどんど痴に迫り轉た愚を極むる者男女相共に和す

るに起り而して配偶相整へざるに苦むにあり賣色索より遊女に非  
 らず悉皆浮薄の業に馴て虚を表するも性ハ善あり一双の玉手千人の  
 枕半點の朱唇万客管ども是あん投の情にて傾城の實豈衆客に波及  
 さん哉世の飽治郎彼が万虚一實を買はんと競ひ春情一刻價ひ千金  
 に換る者あり悲莫情死の原意たるひとへに痴情凝結ひ昔日の苦海  
 十年壁を背負し座禪の床を脱離するの長きに倦み膠漆の契り全か  
 らぬを嘆ずる餘りの所爲にあらざ別に一身上通れ難き事故ありて  
 蜉蝣焦螟の小虫すら惜むを常なる泰山の壽命を鴻毛の輕きに比し  
 死なば諸共冥士の旅も手を取換す道行筋未來は一連托生と頼み難  
 きを頼母し氣に等く屍を蒲團上に晒すの廉耻も外聞り顧みぬ場合  
 に座すると性の愚なるも教育の全うらぬ故にして且此に誘引るゝ  
 の男子その品行端正ならざるに依てあり客と娼妓の情死の相談吉  
 原十二時の記中に洩らし曾て稗書に微細を綴らず不通の臆説三次

郎若紫の結局は且下回の分解を聴け

第二十四唱

去程に山本三次郎の當夜須崎の別邸にて阿美世が爲に身体の膏油  
を絞られ其座に堪す消えも入たき時しもわれ折よく石丸が乳母繁  
野が來合せたるに阿美世が音の止まりしを僥倖に其座を辭して本  
邸に歸る心ははじめより赤き實父の計せの通信忘れもやらず疾行  
て訪ひ慰めんと心苛ち翅駕を飛ばし、甲斐もなく衣紋坂の下口に  
て男子装の阿美世に抑留られ數刻の時間を費したれば夜更たれ  
ども是非ともに逢て事情を問は、やど花川戸より辻駕籠を雇ふて  
遊廓に走せ至り引手茶屋にも立寄らで直に五明樓に登りしに此頃  
若紫の夜毎に通ふ三郎次が傍を他れず客の座敷にとては偶々に顔  
出しするのみ肝腎の閨房の待遇うときより遂に引手の茶屋へも  
此情人ありと三次郎の通ふを知りて若紫が許へとては得意の客を

送りもやらねばさしも盛りを極めたる花の色香も褪ひて初會を除  
て錦の裏畫より禿を茶屋に遣り情人の通ひを待合の辻占とりて蛛  
蜘蛛の糸結ぼれし物思ひ來ぬ夜を嘆つ其外にけふ父親の病死の計書  
母の許より告越し、埋葬の費用の無心愛おと積る有耶無耶の胸の  
關の扉あくる間もなく目に兀る薄化粧まづ間朱羅宇の長煙管額に  
つくつく打沈む耳に轟く階子のおどなひ廊下バタ／＼山本さんが  
お出で妓夫が案内に付き座敷に入來し三次郎を斯と見るより飛立  
つ思ひを番頭新造若妙が手前を憚る落付顔大層遅くお出さんした  
晝間の艶音は屈きんした歎と問つ、俱に本間に入り大引過と酒宴  
もろあ／＼鋪より通知に茶屋も來たりておしけりなんしと新造が  
促すおとばは渡りに舟ひく汐時の月諸とも屏風の雲に入山形星も  
隠れて森々たり後朝の情を知らば今ひとつ虚をもつけや曉のかね  
て誓ひし陸言を忘れあんすな屹度でさんすと敲く脊中の氣休めは

泣て廊下で舌を出すもふへの實今朝の慮忽ち變る早歸り客を送り  
の上草履喧すしきもひと仕切補時移りて若むらさきが次の間よ入  
來る妓夫が生体もなく打臥し、番新の花の戸をゆすり起せば周章  
飛起きオヤ鬼助どん歎おいらんはエサア山本さんは今日もお流連  
か窺つてと言はれて本間の屏風の外よりおいらんエ、と四五度  
呼べども答もなければ無遠慮ながら屏風ひきわけ儼子よりさし込  
む旭影に一ト目見るより恟り仰天朱に染たる兩人の死骸ア、大變  
タヨ、おいらんと山本さんがと叫くを鬼助も何事やらんと走せ  
寄て見る情死の形相コリヤ大變と狼狽ながら階子飛下り樓主の臥  
所に駈入りて斯と告れば寐耳に夫と刎起て自身二階にかけ登るを  
續いて帳場の番頭はじめ妓夫下番も階子バタ、やりて老婆もう  
ろく、若紫が座敷に詰込み樓上樓下の騒動は鼎の沸し如くなり

第二十五唱

茲に復毒醫天公法現の巖に越中にて關謙造師弟の者の俘とあり翌  
朝は當地の地頭にひかれ罪せらるゝの危急の場合その夜旅宿より  
守に付し炊夫老爺六助が醉臥たるを窺ひすまし、在あふ竹竿の尖頭  
にて無斬にも突殺し折節の雷雨に紛れ山路傳ひに徹夜を走り夜明  
て後は追人の者に出逢へんを恐るゝより樹木深く立込たる山林に  
分入りて草を敷寐株をまくらに道の勞れを憩め、夜に入れば其  
處を立出里ある方に下り行岩倉村の旅舎に束縛を脱け遁れし急場  
行李小包と一刀は取返すに暇なければ彼處に遺して逃去しが江戸  
の地を出立する折中野家の用人山本三太郎より受取し數多の路金  
は胴巻にくるみて寐る間も肌を離さず此時までも身に付たれば野  
宿し、其翌る夜より人家ある方にたどり旅宿を求めて起臥も差支  
へなく二三夜經て信濃國小縣郡上田の城下に立出たれば此地の骨  
董店にて旅佩の一刀及び行李風呂敷と手廻りの要具を購求身を裝

ひこらに長く迂路つかば越中にての人殺しを喚付らるゝ事もあ  
 らんに兎角山國に殺氣を避け身を忍ぶに如可からずと是より飛彈  
 の僻邑を此處彼處と打巡る難病療治を言立に阿美世三次郎のふた  
 りより依頼を受し癩病の奇藥を尋ね求むれ共この龍の腮の球不老  
 不死の仙丹にも比すれば一品寅の年寅の月寅の日寅の刻に出生の  
 生膽を採取てろの患者に服用させなば日ならず全愈あすべきにと  
 傳へられし一方を試験たるにはあられ共正しく功能ありとの保證を  
 そいろにお美世三次郎に言入しより實と信じ三百回の旅費の外彼  
 一藥さへ取得なば謝儀の所望に委せんとその頼みに欲の拐かけて貪  
 婪非道の天公夫婦殊に本夫法現は此一藥を搜し當非常の浮富に潤  
 はんど此難事を承諾て江戸の地を發足せしより茲に足掛半年の光  
 陰を費せど其手懸りだに求め得ず飛彈に來りて江戸の妻妙仙に書  
 狀を送り旅中の紀行を述せんと思へど遂に越中にて人殺しの罪さ

へあれば彼をりに取揚られし行李の内には後の證據となるべき書  
 類も収められたればそれ〱官の探偵にて我留守宅を嚴重に詮議せ  
 れんも計り難し斯ては音信せんことも此身に害を招く端一ばらく  
 音信不通とて頓て彼一藥を搜し當り取得て歸るに至りあば當時老  
 中若年寄にもをさ〱劣らぬ内權ある中野家の執成もてそれらの  
 罪を消滅せんは容易なりと聲に問ひ聲に答へ只管に生膽を手に入  
 るべき工風を凝し是よりは貧き者に施療する由宿泊〱に逗留  
 中人毎にいひ觸らし此處に二月彼處に三月と飛彈一國を落なく  
 めぐり行々て東海道を下り來つ駿河の裏道うら富士の甲斐國に入  
 りたるは天保二戊戌年十二月の始め成けり  
 記者附て云天公法現甲州に入し頃幕府の代官小林藤之助氏の所  
 轄にして今を去る既に五十七八年前に沙れり然れば此膽擧の慘  
 狀今も彼地の古老が茶話に間々出る奇聞にして新紙なまよみの

人々ありとも其概畧を知るもあらん故に記者が拙筆もて聊か潤色を加ふるも決して現今流行の根無し種にはあらざる也器きたなしとて其食を捨るなかれ

第二十六唱

却説新吉原江戸町の大娼家扇屋五明樓の樓上にては若むらさきと三次郎が昨夜の情死を今朝見出し主個をほじめ一家の騒動上を下へと混雑なし取敢ず若紫が親元に人を走らし又引手茶屋和泉屋より山本三次郎が主家中野の邸に云々と情死の旨を注進せしかば若紫が母の阿霜は斯と聞き驚き憂ひ本夫清兵衛が病死の間もなく便りと思ふひとり娘が客と情死を遂しと聞き忽ち心轉動し其處にひれ伏悲の餘りに其儘戸外に飛出し何處へか走去しかば扇屋の使ひの者は呆氣にとられ歸るもならず此由を隣家に通じ長家行事と連立て家守(今云差配人某に若むらさきが變死を告げ彼家主と五

人組を同道して立歸りぬ斯て扇屋にては若むらさきの親元へ通知の使丁を待内に彼者の歸り來り母の阿霜の悲嘆の餘りに發狂せしと思しく戸外に飛出し行方知れねば此人々を同伴せりとて檢使を願ふ手續き坏談合する内中野家より斯と知らせに山本の下役ありし吉田鉄彌が主人石翁が内意を得て同勤何某と打連るの場に來たり立合つゝ男女の死骸の邊りを見るに若むらさきの手跡を止めし御母さま若よりどの一通と他に三次郎が遺書一通煙草盆にさし込めるを吉田鉄彌は手に取揚が封じもせねば押披き口の内にて讀下

せば拙者儀近頃身持放埒に依て遊里に立入當樓の抱へ遊女若紫を買馴染候て追々身分相尋候處豈計らん哉此者儀は先年實父市兵衛の勘氣を蒙り一昨々日淺草幡隨門前借家に於て病死致し候拙者實兄清兵衛が一女にて正しく叔父姪に相當り候者に付一層不便相

増主人に不忠實家老母に對し不孝とは存じ候得共中野家の恩義にも反き候次第も有之且は若紫が薄命相迫るを嘆息の餘り決死候舉動見受候て拙者ども心の鬼の責苦自然通れ難く共に自殺致し候間此段主君御始め阿美世殿にも仰上られ憚りながら拙者實家船橋驛老母にも御傳達下され度偏に奉願候死期倉々亂筆不具

三月十四日

中野家御用人衆中

山本三次郎

當下當樓の主佐宇衛門は若むらさきが母への宛に書殘したる一通は何事を認めし歟と封おし切てよむ文言現世の首途急がれし女の筆の後や前字性もおぼろの薄墨は傍へ聞せし新造はじめ傍輩女郎も讀む文の口切くよ悲しみの忍び泣さへ袖を濡れいと哀れを添たりけり

何事もまへの世のやくろくとは申あがら我身程ふしおはせの者はなく親の爲身をしづめせめて万一の孝行をつくし度と存候とある其かひあく父様はかくれひとり殘されし母さまをやしあひまゐらすもつとめの身にて思ふにまかせず先頃よりたよりどもなるべき御方の身の上をばよく承まはり候へば御かくれありし父様のおとゝにて血筋ちかき御人と二世のやくろく致し候後たがひに索性をあかしあひ共におどろき申候此御方も身にせまりし譯ありて我身の年あき候まで待事ならずのあ世の旅をいろぐどの御はなしに我身も母さまひとり此世に残しお先へ參るは不孝ながらしよせんながらへをり候てもおんやしなひもあひ成がたきかおの鳥まことにく相すみ申さず候へ共此世のおんいどま申あげかの御方と道づれいたしめいどの旅に立立どりいそぎ候まゝおんゆるし下されたく何れ御わびは百年の御壽命す



きて後めいどにておしかりうけ申候もはや夜あけ近きにはどりの聲にせかされ御内所御夫婦さまへのおんわびしたゝめ候間おひなくおんいとま乞のみ海山したゝめ残しをしき筆とめまらせ候かしく

彌よひ十四日

おん母泡

わかより

第二十七唱

話説復舊是より前天保七丙申年の舊臘より打續き寒暑時ならず風雨節ならずして全國不正の氣あり疫癘に死す者多く秋季に至りて五穀登らず此が爲に米價未曾有に沸騰し貧民市街に餓死する者江戸の地に多きを見れども有弊に幕府の膝下とて保護豫じめ行届き窮民救助の小屋と稱し府下諸方に雨露を凌ぎ口を糊するの場所を設けるの饑渴を助けしめば貧民亂暴の沙汰も亦く價ひ百孔にして

升量二合八勺の白米を食しかねる者之に換るに當時廉價を極めし食類榮螺の壺焼蚰子の鹽油焼鱒の豆渣餅などを糶として露の王の緒繋ぐも有しが諸國代官地の中甲斐國は江戸を距る近く三十六里と雖も東方に武相の山岳連なり西より北の駿信に跨りて險阻屏風を周らす如く南方の駿河相模に接し富峯の裏面さながら累壁の備へに似て峡中の平地纔に府中甲府四方數里の外を出ず斯る山國なるを以て府外の山家にて賭博を業とし暴行を常とする破落戸不良の徒他國にありて人を殺し財を奪ひし罪を避けんと當國に隠れ折々同徒と集合し産神社の祭祀の日には旅装ひ長刀横たへ同士の惡徒等と合して賭博の廷を社頭に開き此惡業を制さんとして妨ぐる者あれば官私を問はず白刃短銃に答ふるのみ強勢暴威を逞しうし官吏と雖も容易に捕縛難き烏合の暴徒今年五穀みのらずして饑饉に苦む貧民の鵜鷗を徹ち身雁牛羊を殺し食に充るも猶足らぬを

窺ひすまし此舉に乗し國中の富豪に押入心の儘に金銀を掠奪せんとよりく不良の民を教唆し専ら貧者を煽動し黨を組んで時日を定め遂に同年八月中旬同國山梨郡天目山を勢揃ひして獵夫は野銃を携へ農民は葦笠一様にのく竹鎗を提げ隊伍を整へ先手に進まし此殿りは當國はじめ信濃上野下野武藏の山野僻邑に出沒して強奪殺伐をほしいまゝなる猖獗の哀音道師三百餘名この囂集よりて貧民おひく増加し二千人に餘るより暴徒の勢ひ破竹の如く先手はじめに天目山を丹波山に打越して都留郡の各村を蹂躪し豪農家と見認し家は片端より踏込みて金銀米穀残りなく掠奪しあまつさへ他の妻に年若なるも妙齡破瓜の娘と見れば輪姦強淫落花狼籍支る者を切倒し慘忍さながら惡鬼を欺き從横に亂暴し是より路を西にとり摺山惠林寺近傍の村々に亂入し笛吹川をうち渡り石和近く進みたるに饑饉に苦む愚痴無智の貧民ばらば此暴舉に敏

第二十八唱

舞せられておひく走加へる者日夜多きに至るよりあり由々敷一大變事なりと當國の代官小林藤之助及び甲府城代の命として與力同心代官手附俄に防禦の人数を募り先暴徒等が巨魁を探り主謀の數名を召捕らば残るは烏合の窮民ばらたどへ千二千あるとても撲滅させんに手間暇入らずと甲府接近の地酒折村善光寺山の麓まで人数を出して防禦に充て別に探偵吏數名を四郡各村に派出せしめ這回の暴徒が巨魁の者を密に探り求めけり

民貧きときは則ち姦邪生じ貧き不足に生る不足不農より生ずると宜ある哉従前甲州四郡の民は山間僻地の弊として法に疎く俠に遊し賭博をもて業に換へ兎角耕耘の道を務めず遊民無頼の徒多きより凶作饑饉を好機會とし不良のやから黨を結び各郡諸邑に録起して富家に押入り豪農に迫り私財官物の差別あく手當り次第に

強奪し人を殺し火を放ち亂暴擅まゝにして既に甲府接近の地に迫りしより城番代官此暴徒を鎮壓せんと人部を出し江戸よりも加勢加はり石和まで人数を操出し進んで賊と戦ふに博徒まじりの貧民のみ争で城兵に抵抗すべきわづか四五日間に縛に就く者討たる者多きに怖れて山を越へ溪を潜り他國に遁れ残るゝ風木葉の散り失せ稍くにして鎮靜せしかば是より後の一揆の巨魁徒黨の謀者の國中に潜匿しを探偵しおほかた夫と看認し者は無宿家持の差別亦く探偵捕丁を派出せしめいち／＼に撈め捕り甲府に送りて獄舎に下し處刑を江戸よ伺ひける此折甲府近傍の一揆打毀しの首唱者は巨摩郡上條村の農民にていかさま博奕をもて半業とする首曲りと綽號の佐助他五六名又都留郡より發りたる煽動者の一人の原藉當國巨摩郡身延山の麓下々山村の水飲貧農斧兵衛といへる者にて素より強慾粗暴の性にて虎狼に等き悪人ありしが先年武州青

梅邊に出稼ぎ中土地の博徒に交はりて秩父大宮邊の家々に忍び入り専ら強盜を働くを一夜同徒と三人連にて當地の郷士關三郎次が家に押入り白刃短銃の兇器に威して物を奪はん心ありしも其次男誣造は此時十五の少年ながら盜賊入しと兼耳に聞つけ枕邊の一刀引抜き父母の寢所に迫りたる三人の賊に重傷を負はせ既に生捕らんとこの勢ひに盜賊ばらは不意を討たれ撈へたる小銃白刃を其場に捨て逃失しを謙造猶も追躡て討とらんとせしを父三郎次兄孫太郎に制せられて其儘止みしが此折に彼斧兵衛は頭上を切られ逸はやく逃去て上州邊にしばらく潜み疵愈て後中仙道日光街道を往還り所謂おまのはいを業として旅客に添ひ旅泊を共にし寐息を考へ路金は更あり行李所持品を掻浚ひ高飛して立廻るに今年即ち天保七年故郷甲州に貧民一揆打毀しの變發りしと傳へ聞此騒動ころ金儲け此種子あれと取敢ず甲斐の地には入たれど八年以來妻のみを

獨り残りし、我家に空手を提ては戻るもあらず土産の金を得し上に  
 て故郷に歸る資本おしらへ彼打毀しに徒黨して心の儘に掠奪せん  
 と當國都留郡讓原村には甥の太九郎といへる博徒あれば此者方を  
 便りしに太九郎は這回の一揆を發起せし一人にて天目山にありと  
 聞き彼處に走つけ太九郎に面會して暴徒に加はり惡事に馴たる斧  
 兵衛あれば甥もろとをに貧民の集る者に指揮して甲府間近く押寄  
 せしが日あらず城兵の討手の爲に我散らされしのみならず舊來賭  
 博の越上にて知己ある上條村の佐助が家に戸主と共に逃歸りて翌  
 の未明山越せんと相談中御代官小林藤之助氏の手附の目証捕丁の  
 多人數不意に陥込み佐助と等く其場を去らず捕縛せられぬ

第二十九唱

再說甲州四郡此處彼處に饑饉を名とし富家を毀ち金銀米穀を掠奪  
 し殺伐強姦擄まゝに亂暴狼藉を働かし一揆の中に巨魁たりまは多

く近國より集りし博徒にして一所不住の破落戸いづれも強借強談  
 を業とし或時は抜刀を閃かし人を威して金を奪ひ夜陰は更なり白  
 晝をも憚りなく縦横し代官手附八州巡邏の探偵捕吏に尾張さるれ  
 ば背後を返して抵抗し刃向ひ立するの惡徒にして没出自在の者共  
 なれば官より討手のむかふと聞て思ひの儘に路金を貯へ逸く他國  
 に逃るもあり亦途中にて生捕られ甲府に拘引れ牢獄に繋がるも  
 ある中に上條村の曲り佐助は惡徒と雖も一戸の農民家には一女一  
 男もあれば一揆の暴民散亂する際舊來の破落戸同徒下山村の斧兵  
 衛と打連立ゑ家に歸り支度整へしはしが程他國に去りて暴行の罪  
 を避け得とほりのさめたる頃に歸村せんと諸所にて奪ひ取たる金  
 を旅費に充る丈身に貯へ折半は妻に手渡して翌は未明に此地を山  
 越して逃げんと夫れく手配をなし居る處へ御代官小林藤之助氏  
 の手附の目証捕丁の多人數不意に陥込み佐助斧兵衛を目掛けて捕

縛に懸るを佐助もさる者斧兵衛諸共に近寄る捕丁を突退け蹴退け  
 飛蝶の如く働くといへども猫に追れし鼠の如き者あれば終に兩人  
 とも捕縛となりしかば一時爰を退りぞきて先づ兩人を甲府に拘引  
 んど夫れより途を急ぎ來りしに途中にて日も暮れしかば此地の代  
 官へ一泊なし明朝は早々此地を出立んと小林藤之助氏を始め其夜  
 の此處に一泊なし生捕の者に夫れく寝ずの番を附け置きしに  
 如何にしたりけん斧兵衛は繩を切り抜け飛出すに番人共はずは  
 繩抜けわりと呼りながら追蒐けしに斧兵衛隙さず其の一人を蹴返  
 し裏の庭へと逃出すに捕丁共はるれ裏へ逃しぞ大事の罪人逃がす  
 など皆々追ひ蒐けしかど此夜は暗夜にしてあとに雨さへ強く降り  
 來り一寸先の見分も附かざれば是非もあく捕丁の内を心當りの方  
 へ追蒐けさせ跡は代官へと戻りしかば斧兵衛は跡を隠し見て追蒐  
 來し者もなければ此雨を幸ひ途もなき所を這ふ如く梢の音の小嵐

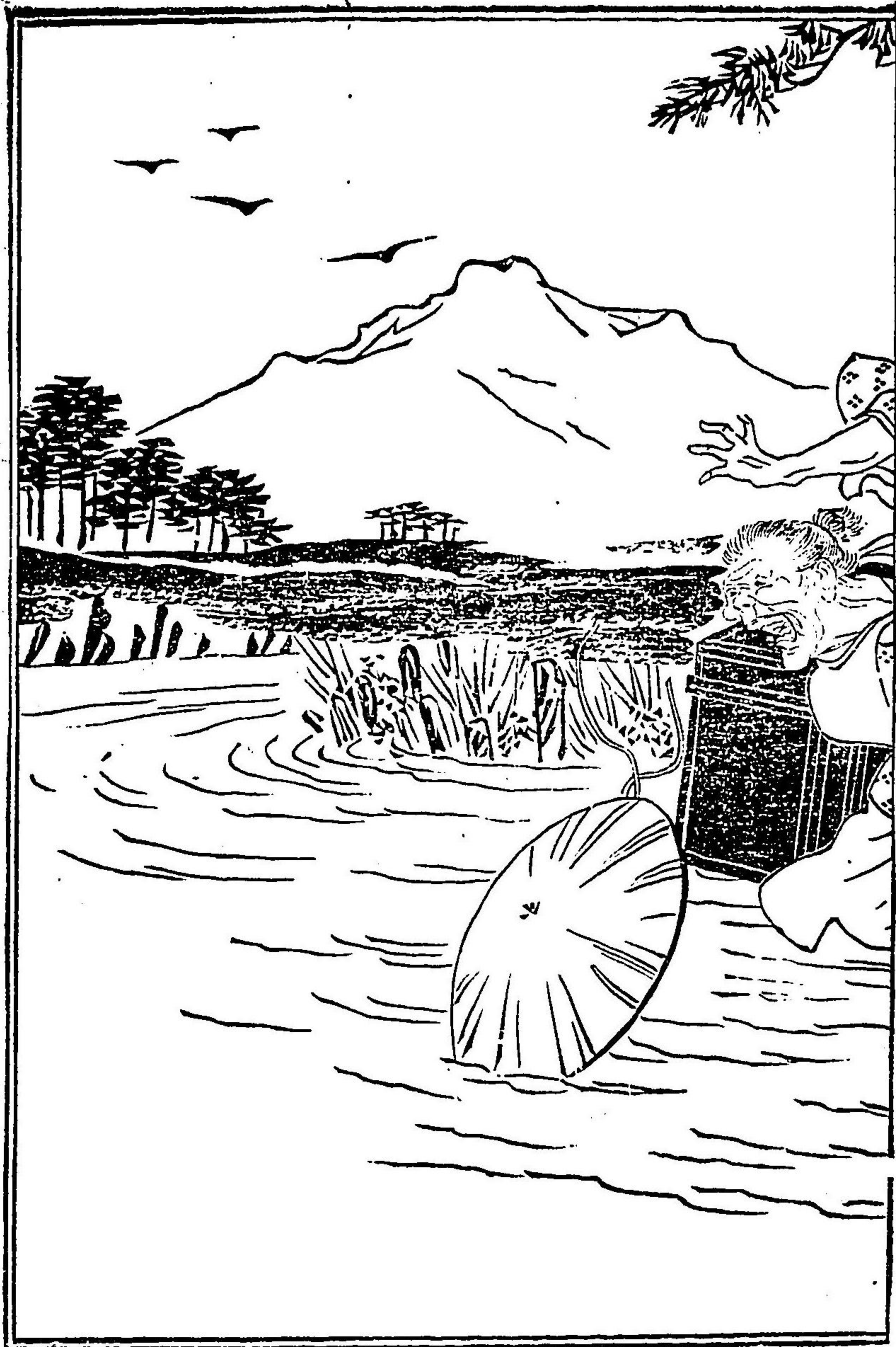
にも心を草に置く露の中をいどいず早や五六里來りしかば此地  
 は何處と四方を見渡すにはるか彼方の山影に火の光さへ見へし  
 ば先づ彼處に行きて身の仕度をなし其後ち身をば忍ばんと腹に問  
 ひ問に答へて近か附見しに其家は山家なれども先づ爰にて仕度を  
 せん者と厨の方へ廻りて内の様子戸の隙間より窺ひば主人と思  
 しき者は居眠して居るにぞ折りこそ宜けれと山家の事あれば戸締  
 さへも寛やかあれば内へ入りて其處此處と見廻せしに隅の方に古  
 葛籠のわりしかば此れを開きて此内の一二枚を出し見れど己れの  
 着物より破てはいれど身を忍に錦ぞと己れの濡たる着物を脱捨  
 て是れと着代飯をも食ひてなほ彼處に狭みある出刃庖丁のありし  
 かば天の與へど古手拭に包み此れをば腰に帯ひ此家の者に認めら  
 れては悪ありあんと表へ出で彼處と考ひ見れど何處の土地やら明  
 分ねば南を指して行かばやと是より亦得も途なき途分け入て足

にまかして二三里も来りしにはや東天紅の頃になりしかば斧兵衛  
はさし登る旭に顔を見らるゝ心地して是より猶も千種の中に潜り  
入り遣ふが如くに殊更途を急ぎける

第三十一唱

當下斧兵衛はさし昇る旭の影にうしろめだき身を屈まして生茂る  
千種の中に潜り入り道なき所を這ふが如く進み行に此邊りは田  
畝稀に人家遠く峻岨を過れば浩々たる野原のみにて幸ひに往來す  
る者絶てなければ戦慄ながら草刈の通ふ捷徑を南の方へ逸二三里  
も来しと見ればその行當りは一筋の急流あれど渡舟場ならず對岸  
へ渡るに便なればあは如何して越べきとしばし此方の岸にイみ  
流るゝ水勢を勘考ふるにこは笛吹の川下にて急流ながら深からず  
將徒歩渡りして對向へうち越し大菩薩の峠を過ぎ一先甲斐の境を  
出むと今曉農家に忍び引渡ひて濡たる衣服と着換たる襦袢の裾ひ

きまくりて水中に足を踏込む折しもあれ川邊に沿し捷徑より老た  
る女の聲としてオーイ〜と呼びかけながら疾足に此場に進むは  
何者ならんと疵持つ隣近付く儘によく〜見やれば年齢六十を過  
しと覺しき旅の老女が小葛籠脊負ひ手に題目大鼓を携へし身延  
參詣の修行者ならんと斧兵衛の安堵の思ひ此方より聲かけて今呼  
ばれし我等のことか何用ありやと問ふに應じ彼老女は斧兵衛が  
前に近付き曲りし腰を猶も屈めて答ふるやう我身は身延參詣の修  
行人先頃故郷の江戸を立ちはる〜當國に杖を進め甲府近郷を修  
行して志願の如く靈山に詣で再び甲府に立戻り江戸街道にかゝら  
んど一町田中の木錢宿に逗留中打毀しの一揆騒ぎに驚かされ亂暴  
人を避むとて山家に便り同宗の信者に乞ひて五六日逗留せしが二  
三日以來悪徒は皆召捕られやうやく騒ぎも鎮まりたれば今朝夙く  
宿りを立出で江戸の方へ赴かんと聞知る路次をたどりしに夜明際



ゆゑ往來もなく迂路くたどりて路踏み違へ此川縁には立出たれ  
 どむかひへ渡る術なきに舟をたづねて川下の方へ行かんとなし  
 折貴老の徒歩渡りなざるやうすを遙に看認め卒爾ながら聲かけ  
 し我身も貴老を杖としてむかひに渡して貰ひたい積りてござる  
 ど頼の詞斧兵衛は此老女の旅装ひに眼を配れば木綿ながらも見苦  
 しからず且脊負たる小葛籠の内には着替もあり氣なれば無下の乞  
 巧にはよもあらし我も是より何國へか高飛するに一錢の路用なく  
 且は昨夜より食事せねば空腹の路次のかゆかず走る者の道をわら  
 まず飢たる者の食を撰まず殺生ながら此老婆を料理て多少貯への  
 旅費を奪ひ食事に充むと胸に疊みて老女が手を採りさらば共に此  
 川を徒歩渡りせん此方へと打連て岸邊に立淺瀬を透し見る振にて  
 今朝奪ひたる出刃庖丁を古手拭巾に包みし儘片手に懐中より密と  
 取出し足場をはかりて突然に老女が胸元ひき掴みあなやと叫び身

第三十一唱

をもがく離しもやらす庖丁を逆手にとりて老婆が胸元笛のくさり  
 を突つらぬけば苦痛の一聲再び音なき首うなだれて息絶たり

水の面に夜あく月は宿れども姿も止めず影も寫さず京阪には總  
 嫁と稱へ江戸にては夜鷹と名け二十四孔の小鏡に露の情を切賣の  
 界き業も辻君と雅名に呼ぶ柳蔭清水にあらで濁江に結ぶえにしの  
 かけ流し夜半の往來の人品を誰と撰までひく袖は東へよざり西へ  
 行法師にもあれ俗にもあれ見當り次第早蕨の手をさし延るあら  
 かの江口の君どうらうへに最はしたなき風情あり霜枯時の淺草城  
 門見張の番士を憚りて散残りたる柳原堤を屏風に川縁の物置小屋  
 を假の宿此處煩悩の棄所る前門に源家を迎へ後門に平氏を送る遊  
 廓の体に引換て甲時に湯堂の木拾ひに接すれば乙時に武家の奴隷  
 に偶し丙丁交々定期を過れば妓夫は直しの聲に促し客は無錢に



背後を見すれば總嫁のやらじと襟首掴み通さじと曳く形勢はさし  
 入る月のかな清と三保の谷が撞の浦の鏡引をおどけ繪に摸て見る  
 も斯やと可笑しくモシエお寄ヨ遊ンでお出と人を見かけて呼ぶ聲  
 は鼻にかゝりて咽喉さきに貼る膏藥も夜風に薰り悪き匂ひに瘡毒  
 のわかしは御免と提灯の光りを厭ひもさすがに人情少しは廉耻を  
 忍ぶなる可し既にその夜も亥の刻過往來も絶一初霜枯風身に染る  
 鐘の音の上野淺草撞ませて總嫁と妓夫の歸去來を促す機曾川縁の  
 小屋を離れしフガク聲與吉さんモウはねて歸らうぜお千代大姐  
 も歸ったさうだ今夜は寒さが一層ゆる川の水を下湯に遣ふも冷た  
 うらうと無性をきめて此儘にお歸りだと身震ひすれば妓夫の與吉  
 はコウお熊あんまり贅澤はいはねへもんだ汝も我儕も去年まで菰  
 被のりお貰ひ同業乞食の内に菰垂の蒲鉢小屋で轉びあひ出来合夫  
 婦の相談が極った上て己の内職乞食は此身のポク除に盜の料を酒

菰隠す悪事の内幕をあかした上で夫婦諸共一端乞食の足を洗ひ  
 本所の吉田町へ九尺二間の新世帯裏店住居もわづか二ヶ月立や立  
 ぬに己が疫病半年あまりの長煩ひに盜み溜た金を失ひ稍くに全快  
 はした者の脚氣の症で足が運ばず盜賊するは逃る足が資本その逃  
 る脚が不自由では素疾い働らきや暴稼さも出来ぬゆる不得上汝に  
 頼んで以前稼いだ覺へがあるど話した聞いた夜鷹渡世現在本夫の  
 此己が妓夫に付のも變な者だが乞食をするより勝だらうと聞いて  
 お熊は傍りに配目り「オイ」與吉さんナンボ深更でも此處は往來  
 おでん燗酒の濁酒機嫌で餘計な口の問はず語り自然他人に聞かれ  
 たら到底どころはおめへの身の上はなしの歸ってゆつくりと「オ、  
 過つたろの事」寝物語のみの蒲團ふうふあふみの水入らずサア  
 相替らず引手の厄介「ホンニおめへの手をひへて歩く姿を白晝見た  
 ら何卒やめくらを助けていふ身で有らうと打笑ひ手をどる妻に

第三十一唱

ひかるゝ本夫殿すりく打連て月をしるべよ立歸りぬ

漬き物のなにくぞ掃除せぬ庭ふるだゝみ元椀折衆汁かけの飯の  
分喰おぼしたるわがり膳着手の給仕帷子の染物鼻糞目くそ爪くそ  
貧しうして諛ふ人何よりも汚き戀といふ其みかみを尋ねれば  
尿糞穴のふたつなりけり此臭皮體にも粉彩ありて色好まざらん  
玉の盃底おき如しと徒然草に誠めの端を開きし兼好が姓氏には同  
じ吉田町夜鷹長家の棟割住居むさきに慣ては掃溜の悪臭臭氣も瘡  
毒に落かゝりたる鼻おどまらず破壁のひま洩りてさし入る月を灯  
に替へ留守の家鹿の栖巢に等しく鎖さぬ門の狗の番拜の宿に夢む  
すふ夜更戻りの夫婦連長家の路次を入る月の導く影のあかりの消  
ても勝手知りたる我家の雨扉あけて二人は内に入りお熊は籠の下  
に有ぬふ燗箱さぐり取り石火を附木の礎石に移し破行燈に家中を

照らし續いてあがる與吉と共に襪襪戸棚おし開き内を覗きて顔見  
合せ與吉さん一寸御覽狂女の縛った儘横になつて白川夜舟するあ  
が狂人の本分夕密として寝かして置け目が覺ると騒ぎ出すくら所  
近隣家が迷惑夕何にしろ寒くて堪らぬ所詮此儘では睡られぬ疾  
く焚火をするが能と指揮にお熊は籠かけし破雷盆の出来合火鉢炭  
俵の口を覆ひし杉葉に木屑うち交て火を焚付て貯への貧乏陶器ふ  
り鳴らし白晝買つて飲残した五合の酒の餘りが未だ二合足らず有  
やう夕火燭の寐酒は利がいと焚火の灰に捨込むを飲まぬ前  
與吉は舌鼓お熊冷くつても我慢するはやく一杯飲ましてくれエ、  
性急お今出来るヨ時に昨夕牛込の久八さんと赤坂の五郎さんが両  
人して引張つて来た狂氣女をおたへ如何する積りで預つたの夕正  
氣の者から欺かして夜稼ぎにでも連れて出るが氣の違つたを知りな  
がら引張つて他の家へ預けるといふ奴も能氣なもんだが又夫を預

かるおめへの氣が知れぬへ馬鹿くしいにも程があると類ふくら  
 ませの苦笑ひ昨夕彼奴等が盜業のあふれに小梅の引舟通りを歸ッ  
 て來ると四十餘りのひとりの女身装は泥に汚れてゐるがまんざら  
 乞巧ども見へぬ風体ふたりを見かけて笑ひかけ深更も怖れず男に  
 對ひつまらぬ話しをしかける容子が如何やら發狂と看受たが犬猫  
 ではねへ眞人間殊更年の更過たが夜鷹に出せば未だ新造小屋に押  
 込み伏玉で役つたなら幾千の稼ぎをしやうと勘考て連て來たか  
 ら如何がなして稼がせて呉めへかど悪業仲間ふたりが頼み厄  
 介ながら引受て預かつては置た者の汝と一所に連て出て自然途中  
 から駈出され行方知らずになつた時はふたりの奴等へ言譯のねへ  
 種失ひ今夜の留守には飛出したらうと縛ッて戸棚の内へぶち込み  
 外からしんばりをかッて置く始末ゆゑ今では後悔の狂人を片付  
 る能勘辨の有めへかど腕組するをさもこそとお熊は肩でせしら笑

ひ火燭の酒瓶さし向くるを五郎八茶碗に一盃受て唯一息に飲乾し  
 たり

第三十三唱

因果應報は造物主の機關にして獨り浮屠氏の方便に出るの語なら  
 ず善惡賞罰の道分れて人の人たる理義全く應報即ち天の然らしむ  
 る所謂なり故ゆゑに不孝不義の者一端盛んにして一時天を凌ぐと  
 雖も之れに代るの國政ありて豈始終の安泰を保ッ者有らん哉天之  
 を懲すに其子孫に波及して世の戒謹の模範とす彙に不孝の罪によ  
 り父市兵衛の勘氣を蒙り窮鬼の苛責に最愛のひとり女を苦海に投  
 じ剩つさへ痛苦迫り幡隨院の裏長家にはかなく失し清兵衛が親の  
 因果その子に報ひ孝にろの身を要川竹の淵に沈めし若むらさきも  
 父が實の舍弟ども知らで結びし惡縁に繋がる血統の三次郎も叔母  
 の阿美世と知りながら道に反き一姦通の罪おのづから身を賣て姪

と契り主人の金を濫用せしのみか阿美世にも分疏くらきゆるあるより舎兄の女と情死を遂しは是汝が罪ぢんちを攻る天理とある云べけれ此訃音を聞と等く清兵衛が未亡人阿霜は本夫が病死の餘日もなく傾りと思ふひとりの女が變死は是れ乍麼如何ある不幸と婦女の狡き心よりはつと計り又逆上せ委きやうすを聞も果たさて其儘家を飛出し所る定れず彷徨歩き子ゆゑの間に晝夜も分で隅田川原のむかしを忍ぶ班女が休の物狂ひ袴飾わたり小梅村の曳舟通りを彼地此地と狂ひ歩きし夜路の途中過る日毒醫法現が旅行の留守を窺ひ其家に押入妻妙仙を惨害なし衣類金銭を掻凌ひ影を匿せし上總の與吉が連累なる野臥盜賊牛込の久八坂の五郎助ふたりの者の目に觸り襦袢をまどひ垢染みたれど四十を纏二ツ三ツ越路の雪の肌白く青葉の陰の遮さくら盛り過ても何處やらに色香残りし賣色脱り狂人よもせよ夜目遠目夜鷹とささば幾干かの身の代金を

得る事あらむと幸ひ悪事を共にせし上總の與吉が瘡に惱みて本所吉田町なる夜鷹の阿熊が家に同居なすを知らば彼夫婦に相談して此狂女を物にせんと欺し誘して伴ひ來しを與吉阿熊は兎を角も二三日動靜を計りて客取る稼ぎの出來もせば此道の元締に抱へさせんと約束しつ家に預り黄昏より夫婦稼ぎに出る留守飛出されては久八五郎助ふたりの者に分疏せしと阿霜が両手両脚を束縛て戸棚に打込み入口の扉にかきかねして出かけし跡は戸棚の内にて狂ひ叫べど長家は多く妻の夜鷹本夫は妓夫と共に出稼ぐ者のみなれば敢て咎むる者もあく今宵も與吉阿熊等は出稼ぎより歸宅なし如何してか彼狂女を欺しすかして夜稼ぎに連れ出して客をとらし喰雑用でも取立むと戸棚の内に束縛の儘横たはりて睡りたる阿霜を引出し何處の者と問はぐラく打笑ひ或はわつと泣出し夫婦の者を白眼つた足下等ハ妾のむすめが客と情死したと詐り他へ住替にやつ

たであらう概容江戸の内では有まい船橋か木更津かたゞしは出羽か奥州か津輕いつばう外が濱たどへ唐天竺へ匿さうとも何處のいづくの果までも尋ね投して逢はずに置かうかお若ヤア！若むらさきヤア！と鉄切聲を震立て四隣厭はぬ狂女の叫びさすがの悪徒與吉夫婦も持て餘してぞ居たりける

第三十四唱

再認與吉阿熊夫婦の者は阿霜が叫び狂ふ体かばかりの癡癡病とは思ひ設けず久八五郎助ふたりの者より預り置しが今戸棚より引出してやうすを見やるに束縛を解きて稼ぎに伴ひ出なばなく客をむかふるは得ならぬのみか途中にて狂ひ叫び手に餘らば身の世渡りの妨かあらん要なき事をしてけりど後悔なしつ其夜はるの儘元の戸棚に押込て夫婢まくらに就し拂曉久八五郎助は暴稼ぎも溢れて客々入來たるに與吉阿熊は繼々起出て前夜の狂女の騒ぎを告

か和主等の目鏡違ひに斯る者を連來たり我等夫婦の厄介に脊負込ませしある迷惑なれ彼狂女を其儘に我家に置かば今夜より夫婦の口が乾上る困難いゆまで戸棚へ入ては置かれず殊に留守中叫かれては隣家近所の人聞わると疾く何處ぞへ連出して再び我家へ戻らぬやう途中より追放し棄てしまふが上分別モウ片時も置のは否と阿熊が苦情與吉が督責ふたりの悪徒も仔細を聞て互ひに頭上を掻く計り幾干のせしめる口算違ひ足手まどひの厄介者念ひ斷つて追放せうがモウ夜が明ては人目にかゝる厄介いのでは今日一日戸棚の内へ置てくれ日が没たらふたりして何處かへ連出し棄て來るといふに夫婦の否ともいはれず此日は其儘預りしに戸棚の内にて阿霜が身動きあらぬ事ども口走りて騒がしければるの音を止めんと久八五郎助は古手拭にて狂女が口に猿轡ひませて鳴を鎮めし後酒酌かばす狭筵に腹温める配心四個支來を付け任せ前夜の勞れに生

体なく足らぬ枕を臂に換へ日の入る頃まで熟睡せり斯て與吉お熊  
 夫婦の黄昏過る頃までも覺ぬものから同長屋の夜鷹仲間に呼び起  
 され夕飯そこく久八五郎助ふたりの者に狂女の始末を托し夫婦  
 連出する程なく夜よ入れば兩個の阿霜を戸棚の内より束縛の儘  
 引出し口に覆ひし手拭ひろ狭ぐつわを締なほし大路は人の目に觸  
 れば淋し氣ある裏町のみよざりて吾妻橋の中央に至るに當夜は宵よ  
 り空かき曇り此時既に雨ふり出し橋上往來の途絶しを看すまじッ  
 、耳に口さし寄せしばしきやき合身動きのみにて歩みを進めぬ  
 阿霜の肩先左右より引摺みて欄干の際におし付久八が押へし狂女  
 の両脚を五郎助の身を屈ましすくひ揚て逆さまにひつくり返し溜  
 らたる水にさんぶと投込し音を聞乘二個等く後をも看ずし逃失た  
 り

第三十五唱

當時淺草花川戸に住居する相撲力士荒馬吉五郎といへる者其出生  
 下總行徳の漁夫の子にして幼稚頃より骨逞しく身丈高く成長に  
 随ひて力量強く父と共に漁業する餘暇近郷近在の神事祭禮に興行  
 の花相撲へ飛入して毎回勝利を得るに委し素人相撲の其中に誰  
 ありて立合はん者もなくろの頃大相撲の小結まで取揚し荒馬大五  
 郎が成田の不動へ参詣の歸途松橋太神宮祭禮の折に行わひ彼處の  
 境内にて田舎相撲の興行ありと聞しかば當所の旅舎山本市兵衛方  
 は定宿されば其家に逗留なし積鼻禪擔ぎの弟子共と打連立て見物  
 する折彼の行徳吉が五人取のはあしき手煉力量なかくに素  
 人業には見も及ばず天晴附出し二段目の端よ出すも其任に不足は  
 あらじと看認しかば豫て懇意の當家のあるじ市兵衛をもて我弟子  
 とせんことを懇望せしかば市兵衛も相撲の好者行徳吉の實父なる  
 治助は我家に出入して常に漁りの魚類を賣込む者ゆゑ治助を招き

荒馬が吉五郎を弟子にせんとその所望の旨を云々といひ聞するに治助父子は太く歡び打連て大五郎に而會し是より吉五郎を荒馬の弟子としそ其場より隨從させ江戸に遣て力士とあすに始め附出し三段目か纏か三年を過ぎる内幕の内前頭の花附面に列あるを師の大五郎は吉五郎に荒馬の名を譲り其身は宮城野と改稱なし四本柱に身を退き年寄株の坐を占たり斯て吉五郎は荒馬の師名を嗣ぎ年歳春秋二回の興行回向院の大相撲にて先輩に勝は譲らぬより其名聲三部に高く頓て大關關脇に進むは荒熊小柳常吉の他からずと愛顧人望その二箇に止まりて毎場興行の繁榮をぞ來たしける斯て荒馬吉五郎はその名都鄙に鳴渡り何不足あき身となりても素より馴し漁りの業に相撲の興行あきをりは弟子を從へ訪諏町淺草川岸の家を出て駒形なる得意の船宿より漁船を雇ひて打乗り大川筋を南方に下り北方に遡り自身網を打おろし間々身の樂みとするもありて

けふも漁船に棹さし世品川沖よて漁りする折節雨の降出たれば日の暮かゝるを機會としイザ歸らんと波の上艦を促して上流にかゝり吾妻橋を越ゆる時投身と思しく橋上より舷近く水煙り飛込む音に船頭はじめ乗組等くわはやと透す水の而沈むと見ゆしが再び浮むはたしかに人ぞソレ救へど荒馬が指指に應じ筋りの照に夜の目も厭はず船頭はろの儘飛入り浮む死骸を小脇に抱へ舷に手をあけ船中に乗込むを待あへず荒馬師弟諸共にかゝりに寄せてなきがらを檢め見れば年の駒四十餘りの女よて水に染むこと久しからねば氣息絶ても動脈ありて死に至らねば身を逆しまに水を吐かせ濡たる衣服を解すて、荒馬が着替のどてらと替換さし七輪の火に焚木を打くべ身を乾かしさまゝに介抱せしかば稍くに息ふきかへし彼女は四邊虚魯く看廻しつ不審の容子に一同は何處の者か事故ありと投身せしと思ひ誤りあらくれ渡世に似ず慈悲心深き荒馬が

俠客氣より我家に連戻りて仔細を問はんと般頭を促す程に艦を早めて諏訪町河岸なる荒馬が家居近きあがり場にゐる漕寄せたれ

第三十六唱

却説荒馬吉五郎は漁り歸りの船中に救ひ揚げる狂女阿霜を弟子の小力士の脊に負いせ諏訪町河岸の住家に伴ひ妻をはじめ家中の者にも有し次第を云々と告聞に猶火に煖め醫師を迎へ服藥の手當介抱怠りなく先づの心を落つけて後に仔細を問へしとて其夜は別間に臥處を設け静に其處に臥せしむるに阿霜は勞れの餘りにやスヤと暈に就しが此時逆上神經の病痾おのづと愈しにや翌朝日高く昇る頃覺然として我に歸り枕をもたげて四邊を見るに此處は何處と知るに由なく獨り蒲團の上に居直り熟我みの來し方を首を傾て勘考見るに淺草幡隨院の裏借屋にて本夫清兵衛が病死間もなく苦海に沈めし娘阿若が現在本夫の舍弟なる山本三次郎と情死の計

音其遺書を見るも等く攻て亡骸にても逢見んと家を飛出し吉原へ赴かんとせし迄の心にとめしが其後の夢とも分かず我にも有らず彷徨うち何處にておふたりの男に伴われ或家に行いましめられ戸棚の内に打込まれしも現の如く覺えたるが其後處の橋よりか水中に役込まれ誰やらに引揚られ此介抱に預りし歎但し一全く爰は冥途の旅宿り十萬億土の途中にや今更惟ふに本夫と娘に先達たれたる驚きの悲嘆迫りて狂氣なし其處とも知らずさまよひ歩き斯る場合に臨みしか若し當家が娑婆にておらば如何なる人の住家からんと唯茫然と不審の体衣服を見れば我物おらず心ならずも問人の來るを待うち當家の下女が藥を侷め粥を煮ておひくゝに運び食せしむるを阿霜も前夜よりの紀食に飢に臨みし折柄おれば下女に謝して箸を探り何かのやらすを問はんとすれど山出し下女のむくつけなる動止に問ふも詮なきと主個の訪ふを待間久しく稍ありて荒



馬の時分を計り阿霜が闇に入來たり前夜の次第を告きあえ如何なる仔細よて吾妻橋より身を投しやと問はるゝより阿霜は口じめて當家のあるじは力士荒馬吉五郎なるを知りその身も行徳の出生なれば清兵衛と諸共に江戸に出し後同郷の漁師の息子に荒馬とて名譽の力士幕の内にいたりとの噂を聞けば頼母しく清兵衛が事已が上娘が情死の始末まで一伍一什を秘せず語り其身が水に投せしハ自らなし、業ならず狂氣ながら臍氣に覺れたるには惡徒等に打込まれたる事と覺しく其禍ひは幸ひの基となりて逆上を水に浸し、故あるか計らず正氣戻りしは全く親方の御庇護なり命の親と伏拜み涕ながらの物語に荒馬も同郷の者と聞より一層の力癒を入れ身に引受せしせんに此上は我家の厨房を鋤てゆるく逗留すべしとて義に勇ましき力士の俠氣阿霜は地獄で佛に逢して猶彌まして心強く是より當家の食客となりて萬事まめしく立働

第三十七唱

て暮しける茲に又本所吉田町なる夜鷹長家阿熊與吉が夜稼ぎの白晝の寐覺は破落戸仲間久八五郎助等の夜働きの支体憩めに身を寄せせる小人閑居の手慰み小皿博奕の勝負の場に孫久八五郎助等が夜働きの悪事探偵届き火附盜賊検め役森新三郎手附の目証與吉夫婦其他二賊が賭の場に踏込てその場を去らず四名を召捕り獄に下し吟味の末與吉久八五郎助は藝に人殺し強盜の罪顯れ與吉は千住小塚原久八五郎助は品川鈴が森よ其首級を獄門に架られたり

茲に復甲斐國巨摩郡下山村の斧兵衛は去る天保七年の饑饉のをり我故郷甲州地方に一揆ありと聞知るより八年以來他國に出稼ぎ行どあるとして悪事を働き得たる金も賭博と酒に遣ひ果せし折柄なれば此暴擧に走せ加はり幾千かの金を得て故郷に歸村せんものど先當國都留郡の暴徒に組し追々四郡の暴民等と合併して甲府間近

く押出す途中城兵の爲に打散され散亂の際上條村なる曲り佐助が家に潜み山越して他國に去らんと佐助と共に身支度最中代官の手に兩個等く捕れて甲府廳へ護送に半途の細脱して辛くも危き場を遁れ笛吹川の下流にて身延參詣の老婆を殺し繞に貯ふ路金を奪ひ山又山を山越しに武甲の境ひ大菩薩の峠を経て裏街道を入王子の大路に出て江戸に走りいさゝかの知音を便り其家の周旋にて小石川なる傳通院の學寮なる役夫となり忍び居しが此處にて故郷の動靜を探るに饑饉年に亂暴せし甲州四郡の暴民等は同く八年の大赦に遇ひ罪の重きハ輕きに處し多く放免せられし中上條村の佐助及び都留郡の太九郎なども出獄して歸村せりと聞くより安堵の思ひを生じ翌九年夏の初旬或夜傳通院の用部屋に忍び入りて有る物品の錢目ある物手あたり次第掻浚ひ衣類は古着屋に賣代なし品物は骨董屋の舖に持行き悉く錢に換て之を路用に故郷なる下山村よ

立歸り十年餘りの年月をふる家の楯に立戻るに此斧兵衛が妻の阿ゑんといへるハ本夫に劣らぬ悪婆にして本夫が長の旅の留守田畑もなき水飲貧農他に雇はれ小作に使はれ或時は己が住家に此近村の破落戸を招き集めて博奕の筵を開き席料を得て糊口とし又は竊に小盗を働き杯じて活計とせしが這般本夫斧兵衛が計らず歸村おしたる土産に幾等か金を貯へ來しを資本として其家は身延街道の路傍あれば此處に居酒の舖を開き往來の旅人を憩はする床凡を据ゑ野菜を煮賣肝太けれど斧兵衛は公然あらぬ隠れ人同様此躬に憚りて其當座不良業を行ふ事なく夫婦ともに慎みあけるが時に天保十巳亥年正月下旬斧兵衛は歐澤まで用事ありて出向しかへるさ路傍の茶店に憩ひ澁茶を啜り煙草くゆらす其折柄岩淵の方よりし醫師とおぼしき惣髪のかしらに雪を頂きしひとりの旅人入り來たり同じ床凡に腰うちかくるを斧兵衛は夫と見てたしかに看知りの人

物としばらく首を回すを彼方も心に覺えや有けん彼方を折々願見  
る中斧兵衛やうやく思ひ出し加失禮ながら貴老はたしか小石川原  
町の天公先生でいおどりませぬかど問はれて法現心に驚き我本名  
を知りたるは何者なる歟最前より少く面顔に見知りある者ど心に  
浮かびしかどさせる懸念の者にあらねば我は其名を知るよし無け  
れど彼はたしかに我名を指せり此奴一癖あるべき面体知已となり  
て動靜を見んと溢茶一口飲さして斧兵衛にうち對ひ誠に愚老は  
小石川なる醫業天公法現なりさいふ和主は何處の人如何なる故に  
我を知れりや江戸人ならば頼母しと膝を此方へ進ましたり

第三十八唱

當下斧兵衛の喫さしの煙草の吸売床凡の端に確と拂ひ天公が面部  
を斜に見やり先生には御存じなく共江戸の土地に一年餘り出稼ぎ  
中近邊を立廻る折節餘處ながらお顔も見知り彼人ころ難病療治の

天公法現様といふお醫者ありと近所で聞知り他に頼まれ一兩度お  
立廻りまで薬取にまゐりし事をありし僕等の甲州は故郷ゆゑ近頃在  
所へ引籠り農業の片手業老妻を相手に居酒の世渡り身延山の麓な  
る下山村の水飲貧農斧兵衛とまうす者今朝鰍澤まで用足しの歸り  
路袖振あふも他性の御縁況て見知りの先生ゆゑ詞をかけたも懐  
かしさが先達つ老の無禮卒忽免させたまへど頭上を低れば法現も  
諸は我を江戸にて見知りし者ある歟不知案内の便宜には此老夫こ  
そよき導きと思へば何くく打うあづき愚老は遁れぬ業用にて家  
を立出て江戸を離れ施療かた／＼旅より旅よ月日を送るも足かけ  
三年目的の志願も果さねば一度江戸より立歸らんと東海道を下り來  
しが路次の序に身延山へ參詣せばやど岩淵より北へ横ざり當國に  
草鞋を入しが甲斐が根だ未だ踏も見ぬ老の初旅方角さへも確定か  
らぬを愚老が名を知り面部を見知りし和主にこゝらで廻りあひし

も宿世の縁といはまくのみ旅は道連身延山の麓とあれば幸ひの歸り足に導きして鹽山の案内を頼みたし愚老が是までの長旅の深き大望のあるゆゑに目立ぬ獨歩も懐中には多くの旅費も貯へあり加之ず自然途中に金の入用ある時は江戸の家に信書を送らば百二百のはした金の爲換を以て届け越す可したとへ幾日逗留する共和主の微塵迷惑をかくるにあらねば安心して身延の麓の良き旅舎に宿りの設けを頼むなりといはれて斧兵衛心の中に此天公といへる者町醫ながら其以前我れ傳通院に在し頃動靜をきしに夫婦等く當時權威ある邸に出入り其妻は針醫とかにて西城の奥向にも常に立入り女藪方に取入て夫婦共稼ぎの驚摺み金の子に子を産せての高利に貸て取わけ老婆老夫も爪に火を灯し飽まで怒張る者と聞か今この談話も詐りならず何不足なき身分にて足かけ二年の旅歩き別子に子細のゐることならん兎も角も福の神の我家に來降まします

なり能く待遇て我家に止め其内手術をめぐらして貯へ持てる路用の金を奪ひ取らんと胸に間に腹に答へてまめくしく先兎も角もむさくろしき芽屋ながら我家まで至りたまひし其上よてよきに計ひまゐらせんと先に立ちて案内なせば法現も立あがり茶代はらふて此處を立出で斧兵衛が案内に附き其日申の下一刻に下山村なる斧兵衛が居酒屋の住家にぞ着にける誠哉類は友を集め眼の寄る所へ惡玉のよるの設けも詫しるなるを斧兵衛は法現を我家に伴ひ楚の塵を俄に拂ひ一室を淨め妻にも密に耳話して脊戸の廣場に据風呂の湯を沸し入浴を勧め店に煮賣の野菜の外流水に生ふる赤腹の小魚の味噌焼取まぜて魯酒の内にも別製の味酒を遠く求め伸し白髪の髭の塵とりくに響應つゝ夫婦代るく酌酌に立ッ居ッ手を盡し取持つ程に索より下腹に毛のなき法現斧兵衛夫婦が奔走の心の底を概畧さどれど何喰はぬ容子して打くつろぎ響應酒のさかづき

を傾むけながら懐中の胴巻の内よりして小判一両取出し今宵宿りの報いなりとて夫婦が前にさし出すにそら辭義しつゝ押返すを強て勸めに受収め猶盃をめぐらす内に法現も斧兵衛もいや八分の酔を生じ主客の雑談時移れど互ひの強飲獸酬の手元を収めず酌む酒の染る腹にも油断せず斧兵衛はまはらぬ舌に法現に打對ひかくむさくろしき我家に宿らせたまふ此身の幸ひ先生の江戸に在し貴紳方のお出入多く不足なき御身分どうけたまひりしに何ゆゑあり物憂き旅を斯の遍歴したまふにや醫道修行とまうすべき御年齢に在しまさず施し療治の江戸にてもあさるべきに遠國邊鄙を彷徨たまふ不審さよびしからずはその子細あかさせたまへと問掛られ法現も此機會に御秘事をわかしてもせば所望し奇藥の手續きをも引出す端にあらんかと飲さし猪口乾し盡し膝立直して斧兵衛がほとり近く寄添たり

第三十九唱

再び説法現は四邊を見廻し聲をひろめて云へるやう亭主の不審實に然り知らるゝ如き愚老が身の上江戸の土地よて門戸を張り衣食に不足あき身にて嶮阻僻郷に寒暑を冒し長の月日を旅より旅にさまよふにの深き仔細あり實の大得意の出入邸或緝紳より世に稀なる一藥を求め來よと托せられ龍の腮の珠にも勝りて得難き一品覺束なくは思へ共虎の穴に入らざれば虎の兒は獲ふる期なく旅の入費は彼品の有無に關係らず償ふ約束のみならず自然彼一藥を求めて歸らば千金に換る約定慾氣は措き愚老夫婦が平常米櫃とも頼む得意日頃の恩義に否とも言はれず承諾て一昨年中江戸の地を發足し出羽奥州三越加能信濃を経て美濃尾張と諸國をめぐり東海道より當國に入るまでの旅行の既に足掛三年普く探り求めしかど今に於て手掛りなければ斷念て當國限りに今回の江戸へ歸宅の積り鳴

呼彼の一薬さへ手に入らば愚老の幸福のみならず手引する者誰彼も數百金に有付うんに搖錢樹は世に稀なりと聽に斧兵衛膝乗出し金にあかまて求むるを手に入らぬとは不審のひとゆシテ其薬は如何なる品と問に法現眞顔にありその一薬は寅の年月日も刻も等くろろひ出生せし者の生膽にて難治の症の癩病に用ふる時不日に功あり然れ共命に換る寶貨なければたまに彼の出生の者ありとも得るに難き此事なりと聞もあへず斧兵衛は小膝を打て忽ちに皺面突出し奇なる哉妙なる哉の注文に割符を合し、寅の年月日時とも揃ひにそろひし出生の男子即ち當村の内にとありとの一言は天公が耳の底を貫き或は歡びあるひは疑ひ開の戲言か全くの實事ならば和主が運の一時に來たる瑞相なり其品愚老が手に入らしめなば即時二百金と引換なん如何くと迫立るに斧兵衛目尻に涙うちよらし疑ひたまうは無理ならねど彼あつらへの人物は他郷

にあらぬ我村内に現在ありて近隣の人々も能知れば決して我等の詐りあらず其者は我家より遠り近き同村の農民友八が三男米藏と呼ぶ十歳未滿の幼兒にて去る天保元庚寅年正月の出生にて不思議にも年月日時そろひし生れと父母のはなしに村中一同誰ありて知らぬ者なしされど彼幼童が生膽癩病の薬となる由疾にも知らば當村中彼の病癩に罹るやから數十人血統を引きて今猶あれば一人の小兒を殺し數名の大人が難病を愈さんと思ふ者も出來ぬべし今先生の物語にひめて聞一薬の此村内にあらんとは世にいふ燈臺元暗一唯今仰せの二百両彼一薬と引換にたまはるに相違なくば我等手術をめぐらして二三日の内生膽は必ず取得てまゐらせん夫までは究屈にはおはさんが我家に逗留なしたまへといふに法現太く歡び其夜の當家に一泊し猶翌る日も逗留して斧兵衛夫婦と酒酌かはし疾く彼事に手を下す奸計をぞめぐらしけるそも、當村

の身延の山嶽めぐりに沿ひ僻地ながらも久遠寺の詣人常に往來絶  
ず大道の身延街道にて商家旅店煮賣店の毎戸列ある大村ゆゑ土俗  
の下山千軒と戸數多きを誇ると雖も元來の濕地にして空氣の流通  
悪きゆゑか往時より人民に癩病の患者絶す原症の血統を引く者一  
家にして此症に罹る者あるひは夫婦あるひは同胞相繼て代々絶  
ず此難症を病たる家あは他家より婚姻の道を斷ち同村中の交際も  
疎々しく穢多非人同等に蔑視せらるゝが口惜く此病家にしていさ  
しかも富める者は良薬と聞知る物の高價を厭はず諸國に求めて服  
すもあれど功驗の絶てあらざりき

第四十唱

齊の桓公味を好めば其臣の調菜人易牙ある者我子の死肉を烹て進  
むるに殊の外賞衛し是より男女の少子を捉へ其肉を屠り食するよ  
り桓公の亡びし古事は傳へて支那の歴史にあり今も亞非利加洲中

馬達加斯加島の土蕃等は人の屠るの祭典を行ひ残忍非道殺戮を以  
て事とす是等は未開野蠻の惡弊異邦は問はず我往古も蠢愚の民  
にはこれらの弊あり其八口に膾炙するの成の年月日刻ろろひし女  
子の生肝に同じ血統の白髪を合し服する時は忽ちに姿を變じ白髪  
の老と化し或己の年出生の男子の生血を眞珠に合し吞めば直ち  
眼病の愈るなど傳へて演劇の脚色とせり蓋し臘昧の世にありては  
斯る例決してあしと爲べからず斯て下山村の斧兵衛は同村の小童  
米藏をすかし出して其膽を拔擧ること難くもあらねど我手ひと  
つにての跡の片附死骸を覆すに始末あし誰か助勢の手を借らん  
どつくも思案をめぐらしつ頓て奸計胸に浮かび同村の農定兵衛  
の癩病ながら小金も貯へ少しく富めるやらすに眼を着け誰渠も忌  
む病宅へ常に親く立入りて最と懇篤に交はる程に定兵衛は斧兵衛  
を親戚にひとしく頼もし氣に待遇つ折々物を投惠せど又同村

の太平次といへる者は手慰みの賭友達飲酒仲間の交り深く此太平次が同居の姪に同病の娘あれば是幸ひと此兩個と酒汲みかはす雑談の中に此頃我家に逗留の醫師何某は我等江戸に出稼ぎ中懇意となりし活醫師の先生の話説には寅の年月日時そろひし出生の男子の膽を生ながらに振擧て癩病人に服さす時は難症忽ち全愈とぞ語って疑惑なきなりと仰せられしが定兵衛どのも申しかねるが他人は勿論親戚までに忌きらはるゝ難病のみか往々の總身崩れ果は命も保つに難し又太平次どのも其家の遺籍と定めし姪むすめが近頃癩病の發したるを見るもあかゝ氣の毒千万他人あがらも兄弟同様常に親く交る我等和主ふたりの難症あるを見るに忍びず如何がなして愈は愈と日頃の心配きのふ醫者殿の話説に付き思ひ出した同村の友八が三男米藏は寅の年月日も刻もろろふて出生し豫まの噂チト慘詰い事ながら小の虫を殺ても大の虫の助よどの聖人の

おほせと聞は密に米藏を引出て其生肝をえぐり取二人で吞だその餘を彼醫者殿に賣渡さば世も得がたき奇藥故高價に買は知てある小兒一人を大人二人に換と云は罪に似て罪に有ぬ天理の當然人に生て人交際のならぬ病を愈んと思から我等も其氣進ぬ中の信友がひに兩肌脱ぎ満間と首尾能米藏が生肝を抜てやらうと和主等ふたりの衆が其場の手傳さつしやる歎と旨く欺く毒舌に言廻されてふたりの者は或は歡びあるひは考へ遂に同意と決心の約束堅く日限と時刻を定めて立別れぬ仕濟したりと斧兵衛は己が宿所に立歸り逗留中の法現に首尾しかくと告きあは妻のあゑんと耳話て期に天保十己亥年二月十日の黄昏頃あるんは居酒屋の店を閉ぢ近隣友八が家の邊りを往還り見めぐるに折節米藏は友達の童兒に別れて昨道の方より獨り日没を看かけ蛙が鳴から己家かへると童謠うたふて家路に向ひ歩み來るを斯と見受あるんの走せ寄り聲うちか



けヤヨ米坊先刻にから甘物やらんと待てをり疾とく來ませと背後  
 を向けると十歳といひ一年弱の頑是なく餌に釣らるゝ淺瀬の小鮒  
 アイと返辭も輕々しくおゑんが脊中に取付を押た釜と負揚つゝ人  
 家離れし合圖の場所に脊負て慾のくら闇坂待まうけたる斧兵衛太  
 平次隠れし藪の中より顯はれおゑんが脊より米藏を抱き取て無二  
 無三口に手拭巾猿ぐつわ無慙やかよわき幼兒をぐるゝ巻に縛り  
 揚げおゑんに別れ米藏を乗する二人が手車の因果はめぐる惡業の  
 後の應報は如何ならん

第四十一唱

春も中旬にきさらぎの十日といへど山間僻地南方は身延の山續き  
 西は駿河の富士の裏嶮岨の屏風立廻らし梅は雷の頭巾を冠り萩は  
 土に懐ろ手して野邊に萌出る若草もかぢけ勝ある雪風の身に染む  
 夜の山路を傳ひ斧兵衛太平次二人の者はおゑんが脊より受取たる

米藏の口を閉ぢ身を束縛し儘昇ぎ擔ひ癩病の定兵衛が背戸を隔ち  
 し竹藪の林に沿し小川の邊にもたげ行て其處に下せば最前より二  
 人の來るを待設けたる地主定兵衛は斯と見るより耳話あひ早やく  
 くと急立るに斧兵衛太平次は黙頭ながら定兵衛に指揮して四邊  
 を見張らせ諸肌ぬぎ身動きのみする米藏がいましめの繩解より疾  
 く赤裸とあし太平次に先兩脚を押へさし頭上の方は定兵衛に取据  
 さして斧兵衛みづから小川の水を小桶よ汲取米藏が胸より腹へあ  
 またゝび浴せかけ順て腰より抜出す出刃庖丁の古手拭巾解捨てむ  
 ざんなる哉米藏が胸の下水落のあたりには馬刺と突立臍の下まで切  
 割つゝ右と左りの乳の下へ眞一文字に切ひらき右手をさし入れ臍  
 臍を探り是なん膽とおぼしきを考へらびて引出すに此時までも  
 米藏は息通ひ肉蠢めくを太平次は取あへす所持の小刀とり出し咽  
 喉を刺さんと突かくるに折節十日の月影は雲間を洩れて米藏が赤

に染し體を照らすに有弊惡鬼猛獸に等き心も此形相に手頭震へて  
四度まで突損じ、が五度目に漸くといめを刺したりとぞ此時斧兵  
衛は用意の小壺に正しき膽と思ひし物をしかと収めて傍へに措き  
別に肝らしき團血を兩斷に切り分これ定兵衛太兵衛のふたりに  
與へ正眞の膽なりと欺きしをふたりは疑ふ氣色もなく歡喜ばし氣  
に押頂き定兵衛はその場を去らず飲をほり手に染む血汐を舐る形  
人間業とは見えさりけり又太平次は時へ來し器の内に半分を入れ  
収め今宵歸らば養女の姪に飲ませんとて雀躍するをさもあそと斧  
兵衛は初めに扱し膽の小壺を竹藪の際に匿し米糠が死骸を刺し同  
人の衣服にくるみ太平次と共に小川の向ひなる荒田の土を深く穿  
ち其處に埋めて立戻りあたりの血汐に塗れし土の鉄にて削り身の  
汚れを小川の水に淨め打連せば人目に觸れんと此處にてふたりに  
立別れ生肝を収めて小壺を携へつゝ我家をさして立歸りぬ斯て太

第四十二唱

平次の定兵衛が搦地を立去り足ばやに歸宅しつゝ養女の姪むすめ  
に子細の深く語らねどあゝ或方にて今宵得し癩病の妙藥あり服せ  
ば忽ち効驗ありと告し儘に與ふるに癩病娘天に歡び地に喜びてあ  
また、び押いたゞきて團血を夫ども見分ずその場に服し胸撫おろ  
して居たりしとぞ爰に亦同村の友八夫婦は日の没たるに三男の米  
藏未だ歸り來ず何處にか友だちの家に入りて遊び居らんと宵には  
さまで念とせず今歎くぞ待内にいや亥の刻も過たるに歸り來ね  
ば訝かしく母は長男と次男に云附けて心當たりへ尋ね又出した  
けり

毒醫天公法現の今宵斧兵衛は彼一藥を頓て取得て歸宅せんと妻の  
おゑんが前報を聞より酒肴を設け置今哉くぞ待内に夜は森々と  
更渡り老の寐覺も眠氣を催し狭き別間に横臥り蒲團被つぎてとろ

くど眠るともあき脊戸口の雨扉ほどく打敲くを妻のおゑんは  
此時までも厨の方ある灯火の下に居て輯麻赤がらに本夫の歸りを  
待をりなれば斯と聞付け立出て鎖しを外し扉を引あぐれば斧兵衛  
は内に入り今歸りしと端折し綿袍の裾を引おろし塵うち拂ひて携  
へし小壺を其處に措きつゝ先生の疾寐て歎と問におゑんは彼處を  
指しされば丑満までは良人の歸りを待受け起ていあつたが妾を相  
手に二三合飲まれた酒の酔心ねむ氣がついて其儘に轉寐の眩まく  
ら風邪ひりせじと上から密と蒲團かけたは今の間といふと黙頭別  
間の内に進み入るに法現のうつゝながら夫婦の話しの耳に入り枕  
にひしく足音に頭上をもたげて面顔を見合し遅かりし待詫たり首  
尾の如何と起あがれば斧兵衛は蒲團の際に坐を占て聲をひそまし  
今宵云々の手續にて太平次定兵衛ふたりの者に手傳はせ蒲團と米  
藏が生肝を扱奉て此内に貯へ來しと壺さし出せば法現は能くも見

ず斧兵衛が盡力を厚く慰問ひ且云やう此壺の内を掬め見んに夜  
の眼は疎き老の悶殊に鶏鳴曉を告るに近き頃なれば和主も無かし  
勞れしからん愚老も寐酒の一盃機嫌酒のめぐりに恍惚したれば翌  
朝はゆるりと起出て明るき處にて検め見るべし夫迄此壺の和主が  
方に確乎と預り置たまへといひ入れて實にもと斧兵衛は然らば翌朝  
の事にせん夜更ばなしは人耳立万一誰かに喚付かれなば先生も我  
々夫婦も支体にかゝる一大事何かの事は夜明て後と此席を退きて  
おゑんの臥たる一間に入り夫婦ひとしく睡りに付きぬ斯て翌朝斧  
兵衛夫婦は前夜いたく夜ふかしせしも怨の眼の覺易く疾起出て法  
現が覺るを待てども一向に起もやらねば苛立て午の下刻に斧兵衛  
みづから天公が闔に進み入り蒲團の上より搖動かすに法現稍く頭  
を上げ眼をすりく起出て夜昨は寐酒の量を過し太く酔し歎大事  
をも忘るゝ程に熟睡せりと居あほりて煙草くゆらし厨に立出て嗽

洗面を洗ひ座に歸り且斧兵衛と膝突合し彼小壺の蓋うち抜き鮮血に淀む生膽をじさし入れて搦ひ出しつらく見やりて飲乾しの茶碗の中に分ち入れ斧兵衛にうち對ひて是れ正しく生膽に疑ひなき癩病の一大良薬さりながら此儘に日を経るは其苦味いよく出てますく激しく口に入ても咽喉に通らず依て此苦味を除かん竹掃木さどの頭に挿し終日日陰に晒し置かば苦味は去りて服用に妨かなければさもあくば服さんとして吐出すに至るべししかなしたまへと告るよぞ斧兵衛は心得て庭の畑の日陰に彼生肝を持出し法現が教の如く竹掃木の尖りに刺し低き庇に干したるまゝ元の座に立戻るを法現は疾あゑんに註文おし酒肴を此場に運ばし夫婦に對ひ彼一薬の手に入る上にはや逗留も今日限り翌は正午より彼品と約定金と引換て發足の積りゆるけふゆるく留別の酒汲かはし相互ひに満足の歡喜を盡さんものと大盃代り五郎八茶碗とりあ

げておみくつがせ續々て三盃飲乾しツ酒と慾どに目のなき夫婦が抜齒に涎を洩らすを看すまし先づ斧兵衛の方へさすにおゑんはグヒく咽喉元を鳴らしながらに酌に立を待設けたる斧兵衛はこれも續けて二三盃息繼わへず忽ち飲乾しおゑんにさすに生憎の陶器の替り日本意なげ首溢々厨に立去ぬ

第四十三唱

斧兵衛夫婦が好酒の癖を豫て看認し法現は是幸ひと心の中に一つの奸計を設けツ貯への麻睡劑を密に陶器の内に注ぎ替り目毎に斯なす程に夫婦は深く沈酔し我を忘れて諸共に丁字の形に其場に倒れ前後も知らず酔伏たるを薦と見すまし法現は拔足さし足其場を退き庭先に密と立出て爰に斧兵衛が竹掃木の尖に刺して日陰に乾たる彼生膽を引離し藥籠の内に叔め元の一室に立歸り身支度整へ荷物と擔が途中で腹や減なんと餘り肴に麥飯湯漬飽まで喰ひ悠

かど草鞋穿しめ飄然と何處ともなく逃失たるのはや黄昏の頃なり  
けり斯ともいざや白波の立舞ふ木々の音も耳には入らず夢にも  
見ず日は全くに暮果たれど表口さへ開放し締めなければ近邊に食  
をわさる地犬が嗅付床に登りて夫婦が臥たる邊に散布皿小鉢の餘  
り肴はいふも更なり飯櫃をもひっくり返し喰盡しつゝ泥足梅花の  
跡を疊に印しかけ尿して尿尻をふりく出する音にも未だ覺ざる  
其折に這回同意せし太平次は昨夜米藏を殺殺の場合に立合手傳ひ  
て我家に戻り臥たる今朝米藏が父母友入夫婦は我子は何處に行し  
やらん其夜さり尋ねめぐれと一向知れぬば親戚を呼あつめ手分ち  
し昨夜より今日へかけ其處よ彼處よ奔走をし捜しよ出る騒動を密  
に斧兵衛に告知らせんと夜に入りて當夜を訪ふに表口の開放した  
るに今頃まで此不締は盗まるゝ物あしとはいへ不用心にも程があ  
る夫婦は留守かど進み入るに行燈さへも灯さぬ一室に厨の音のき

とゆるある借は例の酔倒れ暮るも知らず臥たるからんと探り寄り  
て斧兵衛とあゑんが寝姿撫おろし起ヨくと両手に四五遍揺起さ  
れて稍くに夫婦等く目をすりく起あがる寝惚面誰ぞと問ば太平  
次なりと答ふる聲に四邊を看まはし日の没たるをばじめて覺り夫  
婦はろの場に居なほりながら太平次に打向ひ法現が行方を問ど今  
來たをりに誰もをらすといふに不審とあゑんを促し先行燈に火  
を點じあたりを見れば法現の旅刀行脚はいふも更にて行李も無け  
ればいよく怪み周章狼狽に走せ行肝を乾しさる竹箒木を檢め  
見るに一物なければ借は古狼醫者めに欺かれしか遠くは行かじ跡  
追蒐てひッ捉ね生膽を取り返さんと心の背てど最初太平次定兵衛  
等には語ると詐り血の塊りを分ち與へし奸計あれば此場の始末を  
らにはは語るもあらず取繕ひて話す間もなき火急の場合我等を寐  
こかし出立せし醫者めを追蒐詰問あれば和主の用は後に聽かん何

かの話しは跡にて老婆にいひ置可しと言葉て尻引からげ外の方さ  
し飛が如くに走せ出し老に似げなき鉄脚を飛ばきて大路を甲府の  
方へ息繼あへず二里除り行けどもく影さへ見ぬずこは間道を過  
たる歎と山手の方を又二里ばかり追かけたれど追付かず其内東も  
少しくしらめば夜明なば人に行逢怪められんと脚に疵持つ笹原を  
踏分飛越え行戻り迷ふ思案の止つ追つ隣踏折から山路の方より下  
山村とゆるしたる弓張提灯ふり照らし此方へ來かゝる四五人連あ  
の友藏をたづねに出たる同村の誰渠と思へば周章ふためきながら  
面部を覆ふ袖屏風つと走せ抜てやり過し夜明を告る山がらすよ又  
驚きて倒つ轉びつ本意なく思ふ無念の足摺抜齒の齒莖嚙しめなが  
ら我家をさして立歸りぬ

第四十四唱

燒野の雞子夜陰の鞠人の親の心は闇にあらね共下山村の友八夫婦

は三男米藏が十日の黄昏に立出し儘歸り來ねば其夜同親をはじめ  
とし長男次男分れく同村中を尋ね巡れど行方絶て知れざる中  
夜も明たれば親戚縁者を呼び集め相談あし近隣の誰渠も打集ひて  
額ひを合し幼稚き者の夜を胃し他村に出て或方に泊るべき理由あ  
りども覺えずこの全く神匿しになりたるならんか又は天狗に攫は  
れしか兎も角も棄置し是より四方に手分して近郷近村深山の奥  
谷の下路川々をたづねて見むと一決し三人四人引分れ東西南北へ  
と出去しは同月十一日の眞晝にて即ち斧兵衛夫婦の者が我家に潜  
みて法現と酒釣換せし同日なりき斯て此日米藏をたづねに出し友  
八が親戚隣家の人々は諸方を廻り問合せど米藏が行方の手懸りど  
ての絶てなく捜しあぐみて一同は夜に入りて手を空しく追々に歸  
り來るにぞ當日母親は身延山に登り詣て宗祖日蓮大士に祈願し我  
子の無事に歸り來べきを深く念じ波木井の里に良き卜者のありと

聞き彼處に至りて下はするに易の卦面の雜の卦にて中絶たりとばかりにして生死の程はよくも告ずいと心も結ばれて寥々として立歸るに此時親戚近隣の人々も歸り居て最本意かけに顔見合志安き心もなかりしが當夜は果ぬ相談に猶翌日も捜しに出むと評議まぢくあかしけるに翌十二日の朝まだき同村の小作人民助といへる者他に雇はれ荒田の土を穿たんとて掘起す土中より朱に染たる幼童の死骸あらわれしを一ト目見るより昨今耳に喧すしき友八が三男米藏の噂を聞ひし折なれば皆は此死骸ころ彼童兒の果されど驚く儘によくも見ず鋏投捨て逸足出し友八が家に走せつけ村外れの荒田より幼童の死骸を掘出したり疾どく來たりて檢め見よと慌忙く告るを聞より夫婦同胞をはじめとし此時までも詰合しるの場の人々一同に民助が案内に付いろぞ彼處に走せ到り彼掘出しし死骸を見るに面部惣身朱に染み胸を裁割腹を裂き臟腑溢れて慘酷ら

しき死骸は正しく行方知れざる米藏に擬ひおければこはく如何にど一同は見合せ溜息繼しはし詞もなき聲の木魂に響く友八夫婦長男金太次男の銀二死骸の周りに取付て前後深くうち嘆き取分母の血の涕しほりもあへず死骸を抱わぬ聲ふるはして狂氣の如く扱もく何奴の所爲にて罪も頑是もなき幼兒を斯くむおたらしく殺せしのみか胸を裁割何ゆゑに腹締までも引出せしぞ鬼か悪魔か夜刃外道かよも人間の業とも覺じ親の因果が子に報うと世は俚諺の有奇がら我々夫婦は十八年連添ふ内も慈悲善根を心にかけて虫一疋殺した罪も作らぬうへ旦夕身延の靈山を拜み身に災害もあきやうにと祈りし甲斐もなげきの極めみたりの中に末子の米藏かゝる非業の死にざまは過去に作りし罪科の現世の今に報いし者か豕黠でさへ破鐘の聲たて叫ぶに胸腹を裁割られたる苦痛は如何にありしか情なや無かし七轉八倒して骨も碎け皮も破れ肉も裂たであ

らうぞと頭上を振り身を震し天にあぶがれ地にひれ伏し泪は死骸  
の血汐に混じ韓紅みの龍田川紅葉を流す如くにて傍に見るさへい  
たしく人々袖をぞ浸しける

第四十五唱

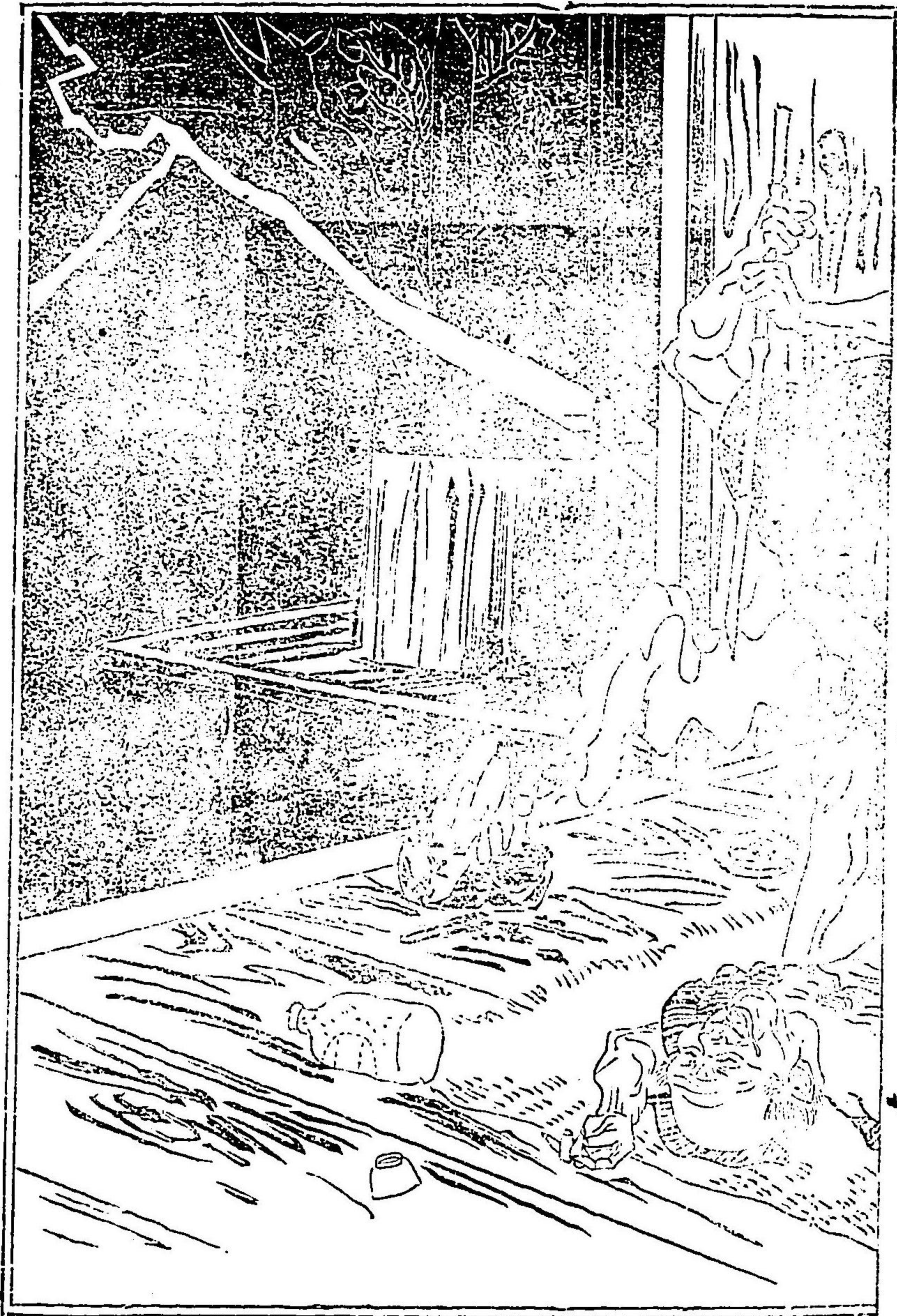
却て説毒醫天公法現は斧兵衛夫婦に盛る酒の陶器の中へ豫て貯ふ  
麻睡劑を注ぎ入れたる功驗にやちゑんも共に沈酔ち夫婦ろの場  
に伏倒れ殆ど生体なきを看認庭に乾たる肝生を引摺ひて身支度整  
へ飄然として戶外に立出で疾より思ひめぐらし、捷徑の山路を經  
て家と共に万澤まで直走りに歩を進め中途夜明て駿河國庵原郡宍  
原より松村に立出つ此處より漁夫の家に便り賃錢の多きになづけ  
一艘の漁舟を雇ひ岩淵まで漕下させ東海道に出るが否哉吉原驛よ  
り一挺の旅駕籠を雇ひて打乗り酒代を増して路次に促し第四日  
に江戸に着し白晝我夜に歸らんこと越中にての惡事もあり且彼地

を遁れ去るをり守りの老夫六助を刺殺して立退し罪さへあれば留  
守中ながら彼折探偵の入來しも計られず自然待綱に罹りやせんか  
先夫よりは駿河臺なる中野家の邸に至り彼の一藥を依頼れし山本  
三次郎に面會なし肝と褒美の金を引換留守の動靜も問聞かむと旅  
装ひを其儘に笠ふかしくと中野家の邸に至り案内を乞て三次郎に  
對面せんと言入るに以前當邸に出入せし法現あれば取次の番士も  
天公を能見知り己が詰所にしるべして密やかに告るやう貴老は長  
の旅中と聞けば必定仔細は知りたまはじ三次郎は云々の故ありて  
去年の三月十四日の夜新吉原江戸町の娼家五明樓の遊女若むらさ  
きと情死なし今は此世にちき人なり夫より前に貴老が旅行せられ  
し留守の夜強盜押入り細君妙仙どのを慘殺なし金錢衣類あまたを  
奪ひし其騒動を知りたまはざやといはれて驚く有繫の法現泉るも  
こと半時餘り暫らく有て溜息吐き三年越の長旅に居所定めず遠國



を遊歴なせば我家を宛ておくりし書狀の返辭も見ねどかならず届  
 きし事ならんと思ふに違ひて留守中に斯の如く災害を蒙りしとい  
 めめ知らず仇に月日を過しゝると今更思へば残念なりと悪事にた  
 けし曲者も其妻の非業の横死と貯への金銭衣類を奪はれし話を聞  
 き口惜涙鬼の眼に溢るを袖にうち拭ひ暇乞して立出しが我家に歸  
 るも憚りあり金銭衣類を除く外さして價のあるものなければ家主  
 許おとづるゝも無益なりと斷念さして行べき心當は須田村の別寮  
 なる阿美世の方と一途に彼處を目的に赴きけり去程に中野の愛妾  
 阿美世は隅田の別寮に産の子石丸諸共に侍女奴僕等を召使ひ何不  
 足なく暮すと雖も心愛は産の子の癩病下地他に知らさず事情あり  
 し甥の三次郎が横死の後には秘密に渉る相談人のなきに万端都合あ  
 りしと爰に大事を立聞されしと疑ひ思ひて刺殺しし侍女繁野を自  
 害の体につくろひし後の始末を三次郎が下役なりし吉田鐵彌に

委託たる事より彼を親く近づけ何くれと赤く頼み依るに鐵彌も阿  
 美世を深く戀慕しよき折あらば言寄らんと主人石翁が登營の留守  
 に隅田の別寮をしぼく訪れ機嫌どりと仕へけるにぞ阿美世  
 は鐵彌が心中を豫じめ推量しつ情ひあり氣にもて忝す程に鐵彌は  
 己が情を遂るゝ近きにありとその歡喜は面部に顯はれ今は大事を  
 あかすとも他處に洩すの妨害なしと或日鐵彌の訪來しをり直接の  
 密談に一昨年中石丸が難病の良藥を求めせんと法現に三百兩の  
 旅費を與へ發足させしが三とせ越けふに至りて歸府なき途の中に  
 於て彼奇藥を得る爲に障り出來て歸るに難き場合となりし歎心に  
 懸るは此事なりと一伍一什を語ら折から玄關前に頼むの一聲若侍  
 ひは之に應じ立出て取次々名刺は別人を知らず此席に嚙をすれば影  
 さして待設けたる法現なれば鐵彌を次席に退かしめいサ此方へと  
 案内に連れ天公は旅の装ひにて小包引提め悠々と阿美世が部屋に



うち通りぬ

第四十六唱

阿美世は天公が坐に附て口誼終るを待わへず四邊を看廻し膝を進め絶て久しき法現どの算ふれば三年越長の旅路の勞れば嘸か志留守の變事に御家内の妙仙どのが賊の手に非業の最期を遂られし歸宅ありて知られし歎早速ながら彼の一樂さだめし手に入れ來られしならんと問れて法現莞爾とうち笑江戶を立しは一昨年四月春と夏との別れ道我等も喰と喰はぬの境ひ當初三百兩たまはりしは留守への手當何やかや千日足らずの旅に稀なる奇樂を搜す事ゆゑ野山辻堂山神の祠に夜一夜わかすもあり艱難辛苦に諸國を經めぐり漸く今月いじめ頃甲斐國身延の山麓下山村の農家の一子に寅の年月日時ろろひ出生せし者ありと聞知りて彼處に便り幸ひ彼の地の村民には癩病患者の多きを機會徳の釣針金の綱に他手を借て

是此如く正眞無二の生膽を首尾よく取得て歸府せしなりと携へ來たる小包開き内より取出す小壺の蓋取除て差出すを阿美世は手に取り底氣味惡氣に日影にかざしつらく見るに血汐に塗れし一塊の膽にやあらんひくくど動めく体は寅の年月日時揃ひし生膽あるか覺束なしと婦女子の性比狐疑深く眞偽の程を見しかね壺を措き小首を傾げ此品生肝ならんとは見受たれども年月日時ろろひし證據の何處にありやと問はせも果す法現は懐靈抜出し中を探り表紙に臍の緒と記したる一書取出し阿美世が前にさし出すを披き見るに天保元庚寅年寅の月寅の日寅の刻出生甲斐國巨摩郡下山村百姓友八三男米藏と記しあるを讀下して疑ひの少しく解し面色あるを法現さもころと膝摺よせ斯る證據のある上は此肝和子に用ひたまはれ難病平愈疑ひあし然のわれど先刻もまうし入たる入費の多數三百兩は路用ろの外留守に遺し盜賊に奪ひ去られし夫のみなら

ア妻妙仙の命まで失はせたる非常の財散鯉一文も身には残らず此  
品取得て歸りなば謝儀は所望に委せんと山本氏より傳達ありしは  
必定お部屋のお指揮ならん依て首尾よく収むる此場この生肝と引  
換に金千兩をまうし受んどいりれて阿美世は常惑顔お聞及びか知  
らねども此事万事を取はからひし三次郎は色に溺れ遊廓通ひに身  
を持崩し去年吉原町の遊女と共に情死なして世に亡き者渠より何  
と約束せしか妾の甲斐なき女子の身仔細はぞんせねど黄金を山と  
積ども換難き人の命たどへ千兩万兩の價ありと言はるゝともさ  
らく無理とはぞんせねど此一藥を和子に服さしさせる功験の顯  
れなば此事是まで我殿には深く秘して私に計らひし業ながら其  
時は打わけて殿より千兩相違なく謝禮に贈りまぬらせん夫迄の妾  
が元手に貯への金子なければ暫らく待てたまはれと聞より法現眼  
を刮出し肩張り臂を突突らし詰寄りながら濁聲高くこは當時威權

併ぶ方もなき中野公のお部屋ともぞんせぬ通辭此生肝も出所ろは  
確平の証據の臍の緒書あれども冥ひたまはゞ密に其地を聞糺さ  
れよ命かけの大盡力をりて藥の功験が見ゆるまで謝金を待てどは  
不當の挨拶和女で婿があかぬなら石翁公に面謁し直談のうへ三千  
兩は耳を揃へて申し受ん夫迄は此の生肝持つて歸ると盡引提げ疊  
蹴立てあらくしく去らんとするをコソ待ッてどいらふる袂を振  
拂ひ隔の襖引あくる此期速く彼時遅く出合がしらにパッサリと浴  
せかけたる刃の光りに法現が肩先より乳の下かけて破亂離すこれ  
はど驚き顔見合せ鎖彌どの歎と阿美世が仰天鉄彌は返す二の太刀  
に天公の首を打落せり

第四十七唱

且説甲州下山村ある友八夫婦一家のもの荒田のうちより同村の  
小作男民助が堀出したる米藏の慘酷しくも胸腹を裁割られたる死

骸を見るより前後不覺に悲み嘆き母は狂氣の如く成しを俵あるべきにあらざれば親戚のこれを謀めばげまじ此由代官所に訴へ出るに當所の代官小林藤之助手附の役人早速此處に出張し死骸を篤と拾め視るに是全く胸部より腹部へかけて裁割たる上臍腑を探り生肝を扱奪し容臍に擬ひなければ何者が此の如く慘殺せしや心當りは無かど問はれ父友入より聞え上るは此小倅事實の年月日時ろひて出生せしを聞知る者の多かれれば自然何かの藥にあど用ひて功驗ありとするやからの手にて暴殺せられ此慘狀に及びしも計り難しと陳るより檢視は此旨心得て先亡骸を引どらし追々探偵密なりしが去る十一日の夜友入が親戚の誰集二三人連立て米藏が行方をたづねに出し其歸るさ當村の入口なる山路の麓に行違ひし其者の姿形容ほ、冠りに面部を包み夜日には夫とさだかあらぬと正しく同村の斧兵衛ありと看認し者の有しかど彼奴の深夜にこゝらを通る

は例の賭奕の場に臨み今頃歸宅なすならんとさのみ怪み心にとむる者とても無かりしが同村中に此の如き騒ぎあるを聞知りながら昨今病癘に托けて其身のみかは妻をさへ見舞にも遣はさぬは最訝かしき事にあそどひとりがいへば又一個さればなり彼奴が舉動怪むべきは四五日以來彼の家に何處の者か近所に見かけぬ醫者体の老人ひとり泊り居て日々に酒酌換せし体を我も見たり誰も見たりと噂さどり、探偵の耳入るより忽ち斧兵衛夫婦ハ捕縛せられ頃日家に宿泊させし醫師体の老人は何處の者にて何たる縁みに逗留へさせしぞと糾問さるゝにぬからぬ斧兵衛さん候彼醫師は我等先年江戸に出稼ぎ小石川にありし頃深く懇意を結びたる町醫天公法現といへる者這般身延參詣の歸途なりとて立寄ていへば年來の懇意に愛足のなやみを看受しより二日三夜家よといめ去る十一日早朝出立いたしひなりと臆せぬ答へを返し返さざらば十一日の深

更何用ありて村外れの山路を通行なしたるぞと再び問はれてら  
どほけ當夜は心地煩はしく晝の内より打臥たれば一切外出の覺は  
なし何故ありて左の如き御糺問を蒙るにやと飽まで圖太き斧兵衛  
を先さしおきと別段よろの妻おえんを糺彈めるに本夫斧兵衛との  
中口違ひて胡亂の廉々あれば必定米藏を暴殺しのかれら夫婦に  
極まりたりと猶もおえんを嚴しく問ひ果の分れくは拷問にかけ  
しかど強惡不敵の斧兵衛のさる事只管覺はなしと言張て實を吐か  
ねど鬼の女房の鬼人といへ有繫に女のいひ甲斐なくて委きやうす  
は知らずと雖も本夫斧兵衛が指揮により去る十日の夕暮友八が三  
男米藏を賑し誘引途中合圖の場所にて本夫と同村の太平次の手  
に渡し我身は歸宅いたしたりと概畧白狀に及びしかば是より斧兵  
衛に突合し嚴しく糺問せられしかば今は斧兵衛包むに由なく遂に  
天公法現が依頼に應じ太平次定兵衛が手を借て米藏が生肝を振

し頭末を悉皆白狀せし取得し肝のしかくの次第によりて法現に  
奪ひさられし跡追かけ手を空く歸宅の途中友八が親戚の誰彼も行  
違ひていなりと逐一陳述したりしかば頓て定兵衛太平次のふたり  
も共に召捕はれぬ

第四十八唱

狼惡の擣杭にあちく兇暴は窮奇に類す斧兵衛が人而獸心云々の  
手續きにて同村友八が三男米藏が生膽を振擧し始末洩れなく白狀  
せしかば其妻おえん運累太平次定兵衛を突合し再應の吟味詰に等  
しくまうじ口符合せしかば此旨當國の代官小林藤之助より江戸町  
奉行に傳達しかの生膽を奪ひ去じ毒醫天公法現此頃今浦昌伯と變  
名せし由松林伯圓の購本に記せりの踪蹟を人相書をもて各地方普  
く探索あると雖も既に此際法現の吉田鉄彌の手に罹り密に死骸を  
匿したる後に出れば知らるゝ由なく遂に天保十一庚子年十一月所

刑極まりて首謀斧兵衛は舊惡と且現惡の重きに照らされ土地樂の  
嚴刑に行はれ其妻おゑん同村定兵衛太平次の兩人はおのゝ斬首  
にぞ處せられける是より前太平次の姪養女おゑのといへる癩病娘  
は肝と心得血の塊りを服せし覺のあるをもて太平次等が捕はれし  
留守に養家を亡命し此處彼處と潜伏しが探索いとも嚴しきに忍び  
かねて前年四月同國石わ川に入水せし死骸を翌日見出たりとぞ  
茲に復中野石翁の愛妾阿美世は内事を托せし法現が三年越にて立  
歸り彼一藥は求め得て持參せしかど其場を去らず金千兩と交換む  
と迫るに困せし折もあれ吉田鉄彌が突然と襖の外より跳り出天公  
が息の音とめしより一時の切迫は凌ぎしかど人の命を取たるゑと  
石翁のおもはく公邊の聞えを恐れ如何はせんと暫時途方に暮たる  
体に鉄彌も己が豫ての所望を送る機會の功に充むとはやりて斯は  
手短く刀下の鬼とはなし、かど此罪を免るべき急の思案も浮かば

折から石翁は西城より退出の歸り途立寄て此体を見るより深く  
驚きつゝ仔細を阿美世鉄彌に問に阿美世は忽地奸智をめぐらし妾  
は素より約束せし覺えなけれど三次郎が存命の頃和子が異なる難  
病を苦とせし故か此法現が勸めに委し寅の年月日時そろひし生膽  
を得て持參せば金千兩に引換むと堅く約せし其肝を何處にてか求  
め得て立歸り持參したれば約定金を渡せよと聞ははじめてさる由  
を三次郎より依頼たるは知らぬ事ゆる謝絶たるに法現太く憤り罵  
り叫ぶ惡口無禮を折よく來合したる吉田鉄彌が聞咎め立入りて論  
すも更に耳に觸れず殿御父子が上妾の事さへあらぬ事共口に委し  
暴言不法を制しかね堪ひ難くや鉄彌が手に斯切殺し候ひぬと毒舌  
翻々朱唇を洩らすは石翁實にもさる事にやと阿美世が詞一途に信  
じ此法現はいぬる頃夫婦等く余が邸に入らせし者と雖もその妻妙  
仙が盜賊の手に殺さざしと噂の後法現が身の上に惡事ありとて町

刑種まりて首謀斧兵衛は舊悪と且現悪の重きに照らされ土地樂の  
嚴刑に行はれ其妻おゑん同村定兵衛太平次の兩人はあの一斬首  
にぞ處せられける是より前太平次の姪養女おゑのといへる癩病娘  
は肝と心得血の塊りを服せし覺のあるをもて太平次等が捕はれし  
留守に養家を亡命し此處彼處と潜伏しが探索いとも嚴しきに忍び  
かねて前年四月同國石わ川に入水せし死骸を翌日見出たりとぞ  
茲に復中野石翁の愛妾阿美世は内事を托せし法現が三年越にて立  
歸り彼一藥は求め得て持參せしかど其場を去らず金千兩と交換む  
と迫るに困せし折もあれ吉田鉄彌が突然と襖の外より跳り出天公  
が息の音とめしより一時の切迫は凌ぎしかど人の命を取たるあと  
石翁のおもはく公邊の聞けを恐れ如何はせんと暫時途方に暮たる  
体に鉄彌も己が豫ての所望を送る機會の功に充むとはやりて斯は  
手短く刀下の鬼とはなし、かど此罪を免るべき急の思案も浮かば

ぬ折から石翁は西城より退出の歸り途立寄て此体を見るより深く  
驚きつゝ仔細を阿美世鉄彌に問に阿美世は忽地奸智をめぐらし妾  
は素より約束せし覺えなければ三次郎が存命の頃和子が異なる難  
病を苦とせし故か此法現が勸めに委し寅の年月日時そろひし生膽  
を得て持參せば金千兩に引換むと堅く約せし其肝を何處にてか求  
め得て立歸り持參したれば約定金を渡せよと聞ははじめてさる由  
を三次郎より依頼たるは知らぬ事ゆゑ謝絶たるに法現太く憤り罵  
り叫ぶ悪口無禮を折よく來合したる吉田鉄彌が聞咎め立入りて論  
すも更に耳に觸れず殿御父子が上妾の事さへあらぬ事共口に委し  
暴言不法を制しかね堪び難くや鉄彌が手に斯切殺し候ひぬと毒舌  
翻々朱唇を洩らすよ石翁實にもさる事にやと阿美世が詞一途に信  
じ此法現はいぬる頃夫婦等く余が邸に入らせし者と雖もその妻妙  
仙が盜賊の手に殺さぬしと噂の後法現が身の上に悪事ありとて町



奉行より其行方を探索ある事豫め聞知りたれば善良無罪の人民を  
 ゆゑ悉く切捨たるにあらざる去ながら詳細事共聞の上なば當家の環  
 瑾昨夜強盜の入たるを討とめたりと訴へ出で檢視を乞が早手廻し  
 しかせよとの指揮に應じ其日公然と檢使を請じ威權高き石翁の訴  
 へなれば一讒に及ばず其儘事濟にて死骸は非人に引取らし小塚原  
 ある回向院出張所にぞ埋めさせぬるの後阿美世は法現が遣し置た  
 る壺の内より生肝と稱し、物を取り出し石丸に服させしかど數日を  
 經れども更に功驗の見ぬのみかは三次郎には引替ていと醜男の  
 吉田鉄彌に蒼蠅追られ否といひ、あれを遺恨に秘密の悪事を他に  
 洩らさん計り難しと怖るゝに予よき程にわしらひ手馴けて服心  
 の者と見せかけ其内首尾して忍び逢はんと氣やすめに日は過せど  
 兎角彼奴を安穩にさしおかば此身の上いつか禍災を被らんと渠を  
 避くべき計策を種々に心めぐらしつゝ、不圖思ひよりて中山ある舎

兄守玄院が長男ある當時山中の祈禱行者知泉院蓮住が許に宛一封  
 の密書を送り吉田鉄彌を調伏の修法を依頼つかはしけり

第四十九唱

當時下總中山なる知泉院當中と聞けしは同國徳が岡八幡別當守玄  
 院光住の實子にして日蓮宗祈禱所知泉院先住の譲りを受父守玄院  
 が後見にて當山の後住を成れり先代中山知泉院の如何ある故にや  
 其頃(天保十)を去る十六年前病死の体にもてなして法名を位牌に止  
 めたれど其實全く死せしにあらざると惟ふに後住の都合により守玄  
 院と密議の上欺取繕ひし事なる可し然るに守玄院が妹なる於美代  
 の方は先年中野播磨守入道が養女となり將軍家大御所家齊公の中  
 臈となりすでに浴姫君加賀宰相齋康卿室仲姫君早世文化十四丑年  
 逝去未姫君松平安藝守齋蕭君室等の御腹よて秀才美貌の婦人なれ  
 ば西城數十の嬋媚中殊に大御所の鐘愛深く威權ならぶ方も亦く此

於美代の方の内縁あるより中山知泉院を將軍父子殊の外信仰ありて諸事の祈禱を命ぜられ上の好む所下之に隨ひ諸民競ふて信ずるより中山の法燈熾んに勢ひ諸宗を凌ぐに至り知泉院父子の者祈禱の秘密他に洩るゝを深く厭ひ内陣に他人をまじへず院代は知蓮院とて則ち守立院が次男用部屋は山本嘉兵衛とて同三男いづれも當代蓮住が實弟なり又一女おみのは松橋驛旅籠屋市兵衛方の養女とすされば於美代の方の實妹阿美世が爲にも正しき甥なる蓮住が中山の祈禱所は密書を送り將來の身母子の害となるべき吉田を調伏の修法を依頼なし程に蓮住は異儀なく承諾ひ其日より沐浴齋戒して帝釋天の鉄像に南無妙法蓮華經と宗祖が遺筆の曼陀羅を懸添百燈赫々百味の供物像前に陳列し蓮住みづから檀上に數珠おし揉み法華經八卷より一掃き太やかある濁聲高く先自我偈より讀經に連れ舍弟智蓮院も傍邊より題目太鼓うち鳴らし等しく讀經の

聲を助け燻らす護摩木の燃火の中に吉田鉄彌を調伏の標牌投り入れ三日三夜丹精を抽で、祈りし靈驗あらはれしと後人これを喋なくせど正法に不思議なし天罰此時あつから惡人の身に報ひ來て鉄彌ハ此頃風の心地と苟且に打臥せしが惡寒發熱日を経て劇しく遂に瘋癲の症となり中野家の長屋に籠り奴僕共の看護にて醫藥を服せど逆上へますくつりのりあらぬ事口走りてはをりくゝま寐床を飛出し狂ひ廻るを石翁は斯と聞き安からぬ事に思ひ先年鉄彌を抱ゆる折亡三次郎が周旋にて其時身元受到立たる者は中山知泉院が舍弟即ち同院の用部屋山本嘉兵衛が負擔たれば早速嘉兵衛に引渡さんと中山に使者を走らし嘉兵衛の來たるを待内に或日鉄彌ハ看護の下部り勞れて眠る間を窺ひ戸棚の錠前捻切りて葛籠の内に匿したる所持の一刀取出し髪も亂れし寢衣の儘戸を蹴放して外の方に飛出す音に附添ひの下部ハ目覺し驚き周章うしろより抱き止め

んと走せかゝるを推參なる下郎めと振ほどきて携へし一刀すらり  
と引拔ッ、振返りて切らんとするにぞ下部の狼狽退きながら人  
殺しくと叫くを聞付け奴僕部屋に居合したる下部四五人手に  
突棒鋼又提げ瘋癲病が刃物三昧疾うち落し生捕れど玄關間近く走  
行く鉄彌を捻倒さんと追蒐たり

第五十唱

中野家の徒士若黨等の給人吉田鉄彌が病床不意の發狂よ白刃を振  
て邸中を暴廻る由聞と等く下部等に指揮して突棒鋼又袖がらみに  
取押へよとひりめき立猶門外に走出し市街を騒がす事ありては當  
家の瓊瑤と表裏兩門を俄に鎖さし疾生捕れど下部を促し東奔西走  
追めぐるに鉄彌はますくたけり狂ひ追蒐來たる下部等が得物の  
下をかき潜り二三の者に重傷を負はし其身も薄疵を諸所に負ひ神  
心惱亂今のはや面部頭上も朱に染み身体勞れ足掻七損ぬ既に翺め

とられんとしたりしかば突と駈抜て玄關の敷臺に腰打懸持ッたる  
白刃に我ど我手に咽喉元深く制貫き其場に伏て死したりけり此騒  
動に石翁主従一家の混雜大方ならず斯る折柄中山より鉄彌が受人  
山本嘉兵衛も此處に來合せ自殺の有様此日の始末委細を聞てうち  
驚き元來鉄彌は嘉兵衛が實父守玄院光住が八幡別當所の侍ひに召  
使ひし吉田藤藏といへる者の一子にて幼稚くして父母を亡ひ孤子  
と成たるを守玄院が小姓として扶助したる者なれば別に親戚のな  
きを以て迷惑あがらるの亡骸を嘉兵衛が引取る事に決し病死の体  
にて故郷ある下總中山に昇もて行き密に寺中に埋葬せり此時阿美  
世は須崎村の別寮に於て鎮彌が病氣重症の体あるを傳へ聞て心の  
中に甥連住が祈禱の功力あるなんゆりと歡喜程なく遂に發狂自殺  
せし由再び聞きて調伏の修法いよく顯れしと胸の雲霧晴たる如  
く今の安堵の念ひをなせり抑も中野石翁が行ひ唐の楊國忠が其

妹楊貴紀が寵愛の餘光を受けて立宗帝に出頭し奢を極め暴威を振ひ天下の權柄をどりしに似て養女於美代の媚を獻じ其餘映をもて無比の君寵を蒙り勢ひの倚靠こと太山の如しと雖も又その勢ひ盡易きに至ては宛も氷の山の如し或の交日大に明かなるの際すあはち此山人を誤るべし云々と宜なる哉楊氏が一門馬嵬の塵に埋もれて汚名を遺す善惡應報整る天保十二年辛丑年即ち膽擧所刑の翌年閏正月晦日徳川十一代前將軍大御所家齊公高壽六十九にして御他界あり同二月廿日午の刻其出棺にて東叡山寛永寺に葬式あり別當津梁院御靈屋は四代殿有院殿家綱公十代俊命院殿家治公と御相殿法號文恭院殿とぞ稱しまつりぬ乍麼徳川將軍家の隆盛なるは當君の治世をもて極とし天明七丁未年將軍宣下執政五十年天保八丁酉年嫡男家慶公に御代を譲り西城に退隱ありて大御所と稱されたまひしも猶新將軍を補佐ありて政道多くは西城の沙汰に出しも御他界未

た日あらずして忽ち政體一變し同年四月初旬より諸役人の黜陟に權家の轉廢榮枯地を替へ大御所在世のをり寵遇殊に深かりしも手裏を反すが如くにて役義を放され甚太しきり知行加増を召上らるゝも間々ある中に中野播磨守入道石翁も此際登營を差留られ嚴く謹慎申付られ於美代の方も首尾さんぐにて二の丸に押込られ又中山知泉院も祈禱に托し不良の始末數條より且は中野石翁の手蔓に纏り西丸の女流に取り入り武家方の奥向を囑着せし背後暗き廉有しを悉く探偵せられ寺社奉行の糺彈にて父子共に流罪にぞ處せられける此時阿美世は身の許を離れ小石川傳通院の別席に移り住しが産の子の石丸も早世し嘆きの餘り病痾を生じ漸々心ち狂ひしく世にあさましき体となり故郷八幡に移されて遂に狂死なしたりと灰よ語り傳へたり

童謠甲斐の膽擧終

妹楊貴紀が寵愛の餘光を受けて玄宗帝に出頭し奢を極め暴威を振ひ天下の權柄をとりしに似て養女於美代の媚を獻じ其餘映をもて無比の君寵を蒙り勢ひの倚靠こと太山の如しと雖も又その勢ひ盡易きに至ては宛も氷の山の如し或の交日大に明かなるの際すきはち此山人を誤るべし云々と宜なる哉楊氏が一門馬嵬の塵に埋もれて汚名を遺す善惡應報翌る天保十二年辛丑年即ち膽擧所刑の翌年閏正月晦日徳川十一代前將軍大御所家齊公高壽六十九にして御他界あり同二月廿日午の刻其出棺にて東叡山寛永寺に葬式あり別當津梁院御靈屋は四代殿有院殿家綱公十代俊命院殿家治公と御相殿法號文恭院殿とぞ稱しまつりぬ乍麼徳川將軍家の隆盛なるは當君の治世をもて極とし天明七丁未年將軍宣下執政五十年天保八丁酉年嫡男家慶公に御代を譲り西城に退隱ありて大御所と稱されたまひしも猶新將軍を補佐ありて政道多くは西城の沙汰に出しも御他界未

だ日あらずして忽ち政體一變し同年四月初旬より諸役人の黜陟に權家の轉廢榮枯地を替へ大御所在世のをり寵遇殊に深かりしも手裏を反すが如くにて役義を放され甚太しきい知行加増を召上らるゝも間々ある中に中野播磨守入道石翁も此際登營を差留られ嚴く謹慎申付られ於美代の方も首尾さんぐにて二の丸に押込られ又中山知泉院も祈禱に托し不良の始末數條より且は中野石翁の手藝に縫り西丸の女流に取入り武家方の奥向を囁着せし背後暗き廉有しを悉く探偵せられ寺社奉行の糺彈にて父子共に流罪にぞ處せられける此時阿美世は石翁の許を離れ小石川傳通院の別席に移り住しが産の子の石丸も早世し嘆きの餘り病痾を生じ漸々心ち狂ひしく世にあさましき体となり故郷八幡に移されて遂に狂死なしたりと灰よ語り傳へたり

童謠甲斐の膽擧終

明治廿四年九月二日印刷  
同年九月七日出版

東京市日本橋區新右衛門町十番地

發行所

町田宗七

印刷者

全所

千明重藏

發賣元

